

学内法策

for communication across the UT



特集:

進んでいます、施設整備

No. 1333

進んでいます、施設整備

一 今年度整備した主な施設

平成13年度からの「国立大学等施設緊急整備5か年計画」に基づき、大学院施設の狭隘解消、卓越した研究拠点、先端医療に対応した大学院附属病院、老朽化した施設の改善について、5年間に緊急に整備すべき施設整備計画を策定し、計画的に実施することが決定されました。本学でもこの5か年計画に沿って整備を進め、その結果新営施設として約23万平方メートル、改修施設として約8万平方メートルの整備が進められています。その内今年度は、新営施設として約10万平方メートル、改修施設として約1万平方メートルの整備が完了しました。今回は今年度整備した施設の紹介です。

本郷地区キャンパス

建築用途:病院

建物面積:4,046㎡

① 医学部附属病院中央診療棟 新営



今回完成した建物は、昭和62年から整備を進めてきた中央診療棟 I 期、外来診療棟、病棟からなる既存棟との有機的な接合を図ることで、一体的な利用による最先端医療を提供できる環境を確保しています。

計画当初から四半世紀が経ち、その間、医療を取り巻く環境は大きく変動し、当初は想定されていなかった遺伝診断・治療、再生医療など、最先端の研究的取り組みが中央診療機能に必要とされるようになってきており、本建物においても従来の診療・治療のみならずCPC(細胞プロセッシングセンター)・治験部門など、新しい機能が盛り込まれています。8階、9階には、寄附により共同研究を行う「22世紀医療センター」を設置し、医学研究、関連事業等の拠点としています。

また、外装は病院地区の連続性のあるファサードを継承し既存建物及び周辺環境との調和を図っています。

構造階数:鉄骨造 地上9階、地下3階延床面積:36,194㎡ 竣工:平成18年3月

② 工学部 2 号館 新営

本建物は、安田講堂前広場に面しているため、広場を 取り囲んでいる歴史的建物のひとつである工学部2号館 の前面と、その上部の空間を利用することにより、歴史 的環境を創造的に継承しつつ、新たな機能要請に応えた 配置となっています。また様々な研究にフレキシブルに 対応できる平面構成も特徴のひとつです。

さらに地震時のゆれを軽減させ安全性を高め、建物の 損傷を減らすための制震構造を採用しています。

建築用途:研究·実験施設、講義室 構造階数:鉄骨造 地上12階、地下1階 建物面積:3,935㎡ 延床面積:28,911㎡

竣工:平成17年10月



既存の中庭と人々の交流・発信の拠点となる半屋外空間 「フォーラム」として再生

③ 地震研総合研究棟 新営

本建物は、地震火山災害時における緊急研究活動の拠点機能としての地震研究所が果たすべき役割を実現するため、免震構造を採用し、最先端情報、防災拠点としての機能を確保しています。

建築用途:研究・実験施設

構造階数:鉄筋コンクリート造 地上7階 建物面積:1,316㎡ 延床面積:7,938㎡

竣工:平成18年2月

⑤ 薬学部本館 改修

薬学部本館は、昭和32年より順次建設され、経年による老朽化、耐震性能が低いため、周辺建物との調和及び外観デザインの影響を少なくするよう、既存との調和を考慮した耐震補強と老朽改善改修を行いました。

④ 薬学系総合研究棟 増築

本建物の外装デザインは、既存の縦基調デザインを踏襲し、周辺建物との調和を図り、本郷キャンパスにおけるデザインコードに従い、3階までの低層部とその上部とに変化をつけた構成としています。

建築用途:研究・実験施設

構造階数:鉄骨造 地上10階、地下1階 建物面積:421㎡ 延床面積:3,943㎡

竣工:平成18年2月

⑥ 工学部11号館 改修

工学部11号館は、昭和43年に建設され、経年による老朽化、耐震性能が低く、大地震に大きな損傷のおそれがあるため、鉄骨ブレース及び柱に炭素繊維補強を行い、外観に現れない耐震補強工事を行いました。

駒場 I キャンパス

⑦ 駒場コミュニケーションプラザ 北館 新営



駒場寮跡地に学生及び教職員約1万人の生活基盤を支援し、快適なキャンパスライフを演出する福利厚生施設として、南館及び和館の整備を行い、教育研究施設として北館(一部を福利厚生施設に使用)の整備を進めており、今回その内、平成18年4月に北館が開館します。

※南館(食堂)および和館は平成18年10月に開館を予定しています。

建築用途:教育研究施設·福利厚生施設

構造階数:鉄筋コンクリート造 地上3階、地下1階

建物面積:2,058㎡ (北館のみ) 延床面積:4,585㎡ (北館のみ)

竣工:平成18年3月(北館)

8 数理科学研究科棟 增築

本建物は、平成7年に整備した建物に640㎡を増築したもので、1階にITスタジオ、講義室を配置し、2階に既存図書スペースと接続する開架書庫を設けています。また、外観のデザインは既存に合わせたものとし、景観の調和を図っています。

9 5号館 改修



5号館は、昭和39年に建設され、経年による老朽化、耐震性能が低く、大地震に大きな損傷のおそれがあるため、南側は、ダブルスキン工法を用い、周辺建物に調和するデザインとし、北側は鉄骨ブレース補強とし隣接する3号館の意匠に調和した耐震補強と内装改修を含めた全面改修を行いました。

① ラグビー場 改修

ラグビー場は、従来のクレイ舗装から、雨天時の利用、近隣住民への砂塵対策から施設機能の向上を目的に人工芝による改修整備を行うことで学生へのサービスの充実を図りました。



柏地区キャンパス

① 新領域環境棟 新営



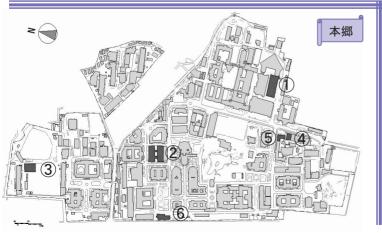
本建物は、環境への配慮として、自然エネルギーの有効利用を目的とした、建物全体を温度差、気圧差、風の誘引効果で自然換気を促進するソーラーチムニの設置や日射負荷を軽減させる外壁ルーバーシステムを採用しています。また、交流拠点としての中庭、屋上には、緑が連続する豊かな交流空間を確保すると同時に、建物の断熱材としての役目も果たす屋上緑化を行うなど、「環境学研究系」にふさわしい施設機能を図っています。

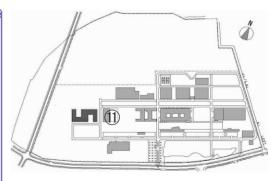
建築用途:研究・実験施設

構造階数:鉄筋コンクリート造 地上7階、地下1階

建物面積:3,490㎡ 延床面積:21,031㎡

竣工:平成18年3月





問い合わせ先:

施設部施設企画課(内線:22205)

NEWS





総務部

平成18年度 学科・専攻等の設置等 について

工学部精密工学科の設置

1. 事由

「ものづくり」が日本社会を支えている重要な産業基盤であることが再認識され、産業界からも、新しいものづくりに対応できる人材への要請が強い。また、この分野は学問領域、研究領域としても日本が国際的に優位に立っており、これをさらに発展させることが重要である。

精密工学は、製品を高精度化・高機能化する要素技術、知能化・頑健化する設計情報技術、それらを集積化・実体化する生産技術を中心とした工学であり、より豊かで持続的な社会を実現することを目指している。精密工学の分野では、精密機械、情報機器、生産機械の領域においてメカトロニクスと設計の知能化を研究の柱とし、ナノ加工・計測・制御などの革新的な要素技術、実装・集積化技術、デジタルエンジニアリング技術などの開発が進められており、この新しい技術に対応できる教育システムが不可欠である。

本学部のシステム創成学科では社会との繋がりを含めた様々なシステムを創成できる人材を育てるための新しい総合工学を目指し、教育方法としてプロジェクトを中心とした新しい教育方法を実施しており、学生が自ら能動的に問題設定を行い解決する能力の向上を図ってきた。

この教育効果をさらに高めるために、教育の対象となるシステムを整理し、大学院及び産業界への学生の進路等を明確にし、機械物理、情報数理、計測制御を基礎としその総合化として精密工学を位置づけ、ものづくりに

対する人材要求に応えた教育を一層充実させることを目的として、システム創成学科を発展的に改組するとともに、精密工学科を設置する。

ものづくりを対象として考え、将来の先端技術の担い 手になるために、学部教育課程においては、現状技術を 表層的に学ぶのではなく、それらの先端技術の基礎・基 盤にある学問をしっかりと身につけることが重要であ る。体系化された基礎をじっくりと学習することは、技 術者として、ロジカルシンキング(問題を筋道立てて考 え、分析し、解決していく能力)及び技術者センス(直 感的に製品の構造や方式などの良否を判断できる直感 力)といった基本的能力を涵養する上で重要である。

カリキュラムは、機械物理、情報数理、計測制御の各分野からなる基礎工学の上に、精密工学の3つの柱(メカトロニクス、設計情報、生産)の分類に従った講義を設定する。この3つの講義の柱に対して、システム創成学科で育んだ新しい教育方法であるプロジェクトを積極的に利用することで、高度化、知能化、高集積化などの技術を具体的に学び、シンセシスへの考え方や方法論を身につけることを目指す。さらにインターンシップを利用して産業界との連携を密接にすることで、現実的な製品や技術を対象とした教育を可能とする。

2. 学位

学士 (工学)

3. 入学定員

学士:45名

4. 開設年月日

平成18年4月1日

理学部地学科を地球惑星環境学科に名称変更

1. 事由

昨今の総合的な地球惑星科学の教育・研究の進展とともに、「生命環境共進化」、「惑星環境」などの研究分野が新たに萌芽し、これに伴い学科における基礎教育の拡充、大学院での総合的な教育に繋がる教育体制を整備する必要が生じた。また、「地学」という名称が地球惑星物理学や天文学をも包含した広い領域をカバーしているため、本来の学科が担うべき研究対象を明確化する必要があることから、地学科の名称を地球惑星環境学科へ変更することとした。

2. 名称変更の時期

平成18年4月1日

3. 新名称の対象年次

現在、教養学部前期課程に所属している学部2年生より新学科のカリキュラムが適応される。(学部2年生の4学期の講義より新カリキュラムを適用している。)学部3年生(平成18年度学部4年生)については、今年度までは旧カリキュラムであるが、平成18年4月1日からの名称変更と同時に、旧カリキュラムから新学科のカリキュラムへと振替を行い、教育に支障のないよう対処する。平成18年度学部4年生については対象とならない。

農学部を3課程15専修へ改組

1. 事由

農学部では平成6年度に課程・専修制を導入したことにより、自由度の高い履修システムが定着し、意欲的な学生の進学も増えるなど、これまでに一定の成果をあげてきた。他方で、課程・専修制の導入から10年が経過した現在、課程と専修が細分化されたことによる弊害の是正、学生の習熟度に合わせた計画的な専門教育の実施の必要性、という課題が指摘されている。この課題を踏まえて、農学分野の特色ある教育研究の多様化、高度化及び活性化の実現のために、カリキュラムの見直しを行う必要があると判断した。

具体的には現行の5課程22専修の体系を3課程15専修の体系に改める。課程と専修を集約することによって、専修が大学院農学生命科学研究科の専攻に連なるかたちで明瞭に設定され、対外的にはもちろんのこと、内部的にも分かりやすい体系となる。また、バイオ生命科学系・フィールド環境科学系・高等動物医療科学系の3つに統合された課程のシステムが、引き続き自由度の高い科目選択を保証する単位として機能することが期待される。

さらに、農学主題科目・農学基礎科目(現行の課程基礎科目を改称)を中心に、科目の構成と内容について、カリキュラム全体のバランス等を考慮した全面的な見直しを行う。農学部の共通科目、課程の共通科目、専修の専門科目からなる三層のカリキュラム編成は改革後も維持し、このカリキュラム編成のもとで、学際的な視野の醸成や農学のミッションに対する深い理解を促すと同時に、日進月歩の各領域の知見に直接触れる専門教育の機会をさらに充実させる。

〔応用生命科学課程〕

生命化学・工学専修、応用生物学専修、森林生物学専 修、水圏生命科学専修、動物生命システム科学専修、 生物素材化学専修

〔環境資源科学課程〕

緑地生物学専修、森林環境資源科学専修、水圏生産環境科学専修、木質構造科学専修、生物・環境工学専修、農業・資源経済学専修、フィールド科学専修、国際開発農学専修

〔獣医学課程〕

獣医学専修

2. 学位

応用生命科学課程 学士 (農学) 環境資源科学課程 学士 (農学) 獣医学課程 学士 (獣医学)

3. 入学定員

応用生命科学課程 145名 環境資源科学課程 115名 獣医学課程 30名

4. 開設年月日

平成18年4月1日

薬学部薬学科及び薬科学科の設置

1. 事由

日本は現在、高齢社会を迎え国民の医療への関心は極めて高く、国民医療の担い手として、質の高い薬剤師が求められている。このような薬剤師を養成するためには、教養教育、医療薬学、実務実習を充実させた教育課程を編成することによって臨床に係わる実践的能力を培う教育を行う必要がある。この背景に基づいて、学校教育法が改正され、その改正を受けて薬剤師法の一部改正が行われた。すなわち、学校教育法及び薬剤師法の改正により、修業年限6年の大学の薬学を履修する課程を修めて卒業した者に薬剤師国家試験受験資格が与えられることになった。修業年限6年の薬学教育課程に対応するため、本学部では薬学科を設置し、良質の薬剤師教育を行い、国民の期待に応える高い能力を有した薬剤師を養成する。

本学部には従来、単一学科として修業年限4年制課程の薬学科が設置されていたが、今回この学科の名称を薬科学科と改め、修業年限6年制課程を薬学科として新規に設置し、2学科とする。従来の修業年限4年制課程では、薬学研究者を養成することを主たる目的とした教育が行われ、大学の教員、国研及び製薬企業の研究者あるいは官庁に優秀な人材を輩出してきた。今回設置する修業年限6年制課程の薬学科は、高度な能力を有する医療薬剤師の養成を主たる目的としており、この点が4年制課程の薬科学科と大きく異なる点である。

修業年限6年の薬学科は、薬剤師の養成を第一とした 教育を行うものであり、教育カリキュラムについては、 日本薬学会が中心になって取りまとめた「薬学教育モデ ル・コアカリキュラム、薬学教育実務実習・卒業実習カ リキュラム | 及び [実務実習モデル・コアカリキュラム] を基本方針に据えて編成を行った。実務実習では、臨床 及び医療に精通した薬剤師を養成することを目的として いることから、熟練した高度の技量を有する薬剤師によ る指導の下に、患者診療の現場に密着した実習を行う。 薬局実習においても実務に精通し、かつ教育能力の高い 複数名の元東京大学医学部附属病院薬剤部教員を指導者 として、その指導下で実習を行う。講義に関しても、新 たに設定された医療系の講義は必修として履修すること を義務づけている。新学科である薬学科の定員を8名と し、上記のカリキュラムによる教育内容に基づいて少人 数による一人一人に行き届いた良質で丁寧な薬剤師教育 が行えるのも特色の一つである。

2. 学位

 薬科学科
 学士(薬科学)

 薬学科
 学士(薬学)

3. 入学定員

薬科学科 (4年制)72名薬学科 (6年制)8名

4. 開設年月日

平成18年4月1日

大学院教育学研究科学校教育高度化専攻 の設置

1. 事由

先進諸国において教育専門家(教師、教育行政官)の 教育は大学院レベルにアップグレーディングしており、 トップレベルの大学が教師教育と学校改革において主導 的役割を果している。初等中等教育の劣化が危惧される 状況において、本学の最先端の学術研究と教育研究を実 践的に統合し学校教育の高度化を主導することは、学術 と教育の未来に責任を負う本学の重要な使命の一つであ り、教育改革に及ぼす影響は甚大である。

本研究科では、他研究科との連携・協力によって本学の最高水準の学術研究・教育学研究と結合した教育内容の高度化、教職の高度化および学校政策の高度化を推進し、指導的な教師の教育(博士課程前期課程)、実践的な研究者の教育(博士課程後期課程)および指導的な教育行政官の養成を目的とした学校教育高度化専攻を設置する。

本専攻は、「教職開発コース」「教育内容開発コース」「学校開発政策コース」の3コースで構成され、全学の協力体制によって創設される。教職の高度化、教育内容の高度化、学校経営政策の高度化の3つを有機的に関連づけ、本学の先端的な学術研究と教育研究を実践研究で統合することにより、科学技術教育、数学教育、言語教育、人文社会教育などの教育内容の開発研究を展開しつつ、学校教育の高度化を担う教師、研究者、教育行政官の専門家教育を推進する。

専門家教育の中核は現場の問題解決における理論と実践の統合にある。本専攻は、カリキュラムの3分の1を理論と実践の統合をはかる実践研究にあて、この実践研究を学問の専門家、教育研究者、教師(教育行政官)が協同で指導することによって、専門的知見と実践的見識を備えた教育の専門家を養成する。なお、教師教育においては他研究科に在籍したまま本専攻を履修できる副専攻のシステムを導入する。

併せて、学校教育高度化センター(既存の学校臨床総合教育研究センターの改組)を附設し、本研究科のCOE基礎学力研究開発センターおよび本研究科の附属中等教育学校と連携して、本専攻の研究と教育を全国化する。この事業をとおして大学院における教師教育の先端的モデルを開発することにより、本専攻が学校教育の高度化における指導的役割を果すことが期待される。

2. 学位

修士(教育学)、博士(教育学)

3. 入学定員

修士課程21名、博士後期課程12名

4. 開設年月日

平成18年4月1日

大学院工学系研究科バイオエンジニアリング 専攻、技術経営戦略学専攻の設置

【バイオエンジニアリング専攻の設置】

1. 事由

我が国では世界に先駆けた少子高齢化の進展が予測され、活力ある長寿社会を実現するための医療・健康技術に対する関心が高まっている。近年取り組みが拡大しつつある医学・工学の連携研究(医工連携)によって実現される医療技術や創薬技術向上等による「QOL(生活の質)改善」が期待されている。また、20世紀終盤から地球資源の有限性が認識され、「社会の持続的発展」が人類の最重要課題として認識されるようになってきた。そこでは、医療、食料、エネルギー、環境等人類の基本的生存を支援する科学技術が注目を集めており、その中で医学・薬学を含む広義のライフサイエンス(生命科学)が重要となってきている。

ライフサイエンスと社会を支える実学としての工学分野との連携は、上記のような高齢化社会における医療・福祉の高度化、持続的社会の実現に必要不可欠であり、さらに、バイオテクノロジーの進展に伴い、生体材料を用いた医療材料の開発、生体機構を応用した機械メカニズムの構築、化学技術を応用したバイオマスの高度利用など、工学分野との連携は多岐に渡っている。しかし、これまでのライフサイエンス技術において、生命現象や生物諸機能に工学的手法を利用してこれを解明し、その基盤に立脚して「社会の持続的発展」に寄与する技術体系の構築を目指す生命工学分野では、多くの可能性と課題が残されたままとなっている。

このような状況の中で、バイオエンジニアリングは、医学と工学、ライフサイエンスと工学の境界領域に位置し、これらの領域と工学との融合による新たな価値の創造を目指すものである。既に欧米の主要大学の多くにおいては、バイオエンジニアリング研究のための組織、あるいは専攻が設置され、こうした分野の研究の核となっている。我が国においては研究室単位で関連研究が実施されているものの、医工連携の例を除いては、工学系の研究科に専攻という形で横断的な教育が行われている事例はほとんど見当たらない。このような状況から、工学系の新たなバイオエンジニアリング教育研究拠点を整備することは、我が国にとって極めて、焦眉の急である。

今回のバイオエンジニアリング専攻の設置は工学系研究科の既存資源を活用しつつ、国内有数のバイオエンジニアリングの教育研究拠点を効率良く形成するため、研究科の既存研究領域と関係を有するメカノバイオエンジニアリング、バイオエレクトロニクス、バイオデバイス、ケミカルバイオエンジニアリング、バイオマテリアル、バイオイメージングの6つの研究分野を横型に連携し、新たな組織として立ち上げるものである。バイオエンジニアリングは多岐にわたるため全貌を把握するのが難しいといわれるが、本専攻が提供する講義を履修することにより、バイオエンジニアリングに対する広い知識と6

つの研究分野の中の特定の分野における深い理解力を身に付けることが可能となる。また、産業を先導する創造力と実践力へとつながる基礎力を養成するために企業との連携プログラムを実践し、健康で活力に満ちた社会や持続的発展が可能な社会に求められる事業や製品のコンセプトをデザインする能力、新しい技術を創造し事業化するまでの企画力を身に付けることができるようにする。

2. 学位

修士(工学)、博士(工学)

3. 入学定員

修士課程24名、博士後期課程12名

4. 開設年月日

平成18年4月1日

【技術経営戦略学専攻の設置】

1. 事由

社会は現在、世界的規模での変革期にあり、科学技術分野では全く新しい分野が創出されている。そのため、これまでの業種業界を横断し、融合するような、技術システムの開発や社会システムの改革がますます重要となっている。また、従来型の産業分野においても、高付加価値型産業への展開を図るためには、研究開発と生産・経営を戦略的に統合し、事業の展開を図れるような俯瞰的視野を持った高度専門職業人への期待が、産業界では高まっており、科学技術の成果を新事業・新製品に結実させる中核的リーダーを養成し、新しい事業を推進させていくことが、企業経営の緊急課題となっている。

一方、公的研究開発機関に対しては、世界の研究開発 レベルを見据えて新産業創出に資する開発を推進する総 合的リーダー人材の育成が喫緊の課題であり、また行政 機関に対しても先端科学技術を中核に据えた新しい社会 システム構築をリードできる人材の育成が急務である。

このように、科学技術立国をめざす我が国において、 先端的な科学技術に対する幅広い理解力と未来社会への 俯瞰力を身に付けた総合的人材が、変革期にある我が国 の産業界と公的研究開発機関から求められている。その ためには、これまでの専門分野ごとに細分化された工学 部・工学系専門教育だけでは不十分であり、科学技術に 対する専門的知識と技術戦略的思考方法を併せ持つ人材 を育成するための、既存の枠組みや分野を超えた専攻横 断的教育を実施する必要がある。これを受け、工学系研 究科では専攻横断型の「技術経営戦略学専攻」を設置し、 工学の各分野に共通する技術戦略、マネジメント戦略に 関する教育・研究事業を行う。本専攻の設置により、産 業界と工学分野において、戦略的な構想力を発揮できる 中核的リーダー、すなわち、高い志と強い責任感・倫理 観を持ち、科学技術を活用した新産業イノベーションと 持続可能な産業社会を、多面的視点から創出できる人材 を育成する。

本専攻の独自性は、先端科学技術の総合的理解と、社会と産業を変革するイノベーションのあり方とその実現

へ向けて、①技術開発のマネジメント、②政策と戦略の誘導、③持続可能な技術社会への構想を実践できる人材の育成にある。そのために、①事例研究に基づく技術経営学・技術開発学、②社会へのシステム工学的アプローチ、③技術革新と新事業開発・新製品開発のプロセス分析とモデルづくりについての研究及び教育を行うところに、新規性と独自性がある。また、研究開発を事業に結び付ける過程や起業家精神の涵養と実践、知的財産戦略とその戦略的実行等に繋がるプロセスを、産学連携による実践的な教育プログラム(PBL等)、事例研究などを実施して、総合的かつ具体的に学ばせるところにも特徴がある。併せて、高度専門職業人教育や社会人再教育等社会との連携を積極的に進める。

2. 学位

修士(工学)、博士(工学)及び博士(学術)

3. 入学定員

修士課程12名、博士後期課程6名

4. 開設年月日

平成18年4月1日

大学院新領域創成科学研究科自然環境学専攻、環境システム学専攻、人間環境学専攻、社会文化環境学専攻、国際協力学専攻の設置

1. 事由

新領域創成科学研究科環境学専攻は、学術の融合により環境を総合的にとらえることを目的とし、自然環境学、環境システム学、人間環境学、人工環境学、社会文化環境学、国際環境基盤学の6大講座を一専攻として運営してきた。設置後6年を経て、大講座分野ごとの自立性と大講座間の学融合のあり方が明確となったことから、外部機関との機動的な連携や環境学研究系内部での教育システムの確立に向けて、大講座を専攻化し、教育研究組織として整合をはかるべき状況になった。これを受け、平成18年度の柏キャンパスへの環境学研究系の移転を機に、これまでの6大講座を、自然環境学、環境システム学、人間環境学(人間、人工大講座を統合)、社会文化環境学、国際協力学の5専攻として、環境学研究系の教育機能を中心に整備し、より明確な研究教育の枠組みを提示する。

各専攻の教育課程編成の考え方及び特色については、 以下のとおりである。

<自然環境学専攻>

- ・陸域環境学と海洋環境学を融合させ、地球環境の統合 的研究・教育の充実を図る。
- ・高い自主性と大きな自由度を持った研究・教育システムを構築し、自然環境の基礎研究の発展と現今の緊急かつ多様な地球環境問題の解明と解決を行い得る人材を養成する。
- ・生態系の深い理解に基づいた新たな持続型環境を創成 できる人材を養成するため、野外調査や野外実験を重 視した実践的授業を展開する。

<環境システム学専攻>

- ・環境に及ぼす諸問題を、トータルシステムとして捉え、 これらの解決に必要な対応策を見出すため、工学・経 済学・保健生態学などの手法を融合して、環境システムの分析及び統合化による持続可能な社会システムの デザインに関する教育を行う。
- ・環境技術者養成プログラムと環境管理者養成プログラムの2つの教育プログラムを実施し、環境の実態把握を目的としたフィールド・ワーク実習を導入し、現地における気圏・水圏・地圏の計測方法を体系立てて教育する。フィールド・ワークを通じて、環境汚染の実態を実体験し、環境計測・分析の方法や計測・分析結果の解釈の仕方あるいは計測・分析結果と実現象の間の誤差評価など、講義室の講義だけでは学ぶことのできない多くの事柄を学ぶ。このような環境教育の基本の一つであるフィールド・ワークを各プログラムに組み込むことにより、学生に対して環境の計測・分析方法を系統立って教育することが可能となり、これまでの教育体系がより充実したものとなる。

<人間環境学専攻>

- ・人間から人工物を含む自然環境までを多面的に、きめ 細かく、かつバランスよく理解し、価値を高めるため の解析技術、センシング技術、可視化技術、設計技術、 制御技術、管理技術等についての総合的な教育研究を 実施する。
- ・人間、生産設備、エネルギー機器、物流、情報等の多様な環境の存在を前提として、普遍的な技術体系の確立とロバストな適応性を具備した専門家を養成する。
- ・健康やスポーツ、それを支える科学技術に亘る新たな融合領域を担う人材を養成するため、カリキュラムの一つとして『ヘルスサイエンス教育研究プログラム』を設置し、特色ある教育・研究を行う。本プログラムは、研究者養成を目指した医工連携教育研究プログラムを包含するが、加齢に応じた合理的運動法、リハビリテーションの科学的分析など更に広い領域との融合を図り、高齢化を迎える我が国において新たな産業創出に貢献できるような人材育成を目指す。

<社会文化環境学専攻>

- ・本専攻は、「人間と社会及び自然との交渉」「水を中心 とした物質循環」「人間が居住する空間」の三つを教 育研究の対象とし、総合的な社会文化的視点から、対 象の理解と創造のための思想並びに技術の確立を目指 す。
- ・環境を単に物理的側面だけで考えず、社会・文化的側面を含めて幅広く捉え、それを環境デザインにつなげることのできる人材を養成する。

<国際協力学専攻>

・本専攻の教育研究の主たる対象は、政策協調、開発政 策、環境・資源政策の3分野であり、学融合の理念を 具現化するためにこれらを横断的に3クラスタに再編成し、構造的なカリキュラムをとおして自律的連携を図り、「国際協力学」の更なる進化を目指す。主要3学問(社会科学・工学・農学)における基礎的分析手法とこれらの有機的連携のための教育を専任教員の主たる担当科目とし、国際協力分野の研究に不可欠な現場からのフィードバックと実践的応用力の教育については、協力・連携教員の主たる科目とする。

・国際協力に関わる課題の複眼的・多面的分析能力と政策立案提言能力の醸成を目的とし上記アプローチにより国際協力課題領域への学融合的研究能力の深化発展を目指す。

2. 学位

自然環境学専攻 修士 (環境学)、博士 (環境学) 環境システム学専攻 修士 (環境学)、博士 (環境学)

人間環境学専攻 修士 (環境学) 又は修士 (科学)

博士 (環境学) 又は博士 (科学)

社会文化環境学専攻 修士 (環境学)、博士 (環境学)

国際協力学専攻 修士(国際協力学)、 博士(国際協力学)

3. 入学定員

自然環境学専攻 修士:46名、博士:20名 環境システム学専攻 修士:21名、博士:9名 人間環境学専攻 修士:38名、博士:16名 社会文化環境学専攻 修士:32名、博士:14名 国際協力学専攻 修士:20名、博士:10名

4. 開設年月日

平成18年4月1日



学生部第2次



第2次学力試験(前期日程)の合格者、同(後期日程)第1段階選抜結果の発表

平成18年度本学入学者選抜の第2次学力試験(前期日程)の合格者2,768人の受験番号が、3月10日(金)13時頃、本郷構内で掲示により発表された。

また、同時に第2次学力試験(後期日程)の第1段階選抜合格者の大学入試センター試験試験場コード・受験番号も 掲示により発表された。

なお、各科類の合格者数等は次のとおりである。

第2次学力試験(前期日程)合格者数等

| 科 類 | 募集人員 | 合格者数 | 最高点 | 最低点 | 平均点 |
|------|-------|-------|----------|----------|----------|
| 文科一類 | 373 | 373 | 430.4759 | 350.0204 | 372.0097 |
| 文科二類 | 327 | 328 | 446.1869 | 333.8982 | 356.3438 |
| 文科三類 | 432 | 435 | 417.3536 | 329.7205 | 349.3943 |
| 理科一類 | 1,025 | 1,045 | 454.6758 | 324.6760 | 355.0478 |
| 理科二類 | 492 | 507 | 437.3981 | 323.1094 | 348.8029 |
| 理科三類 | 80 | 80 | 488.7203 | 394.9647 | 417.4049 |
| 合 計 | 2,729 | 2,768 | | | |

第2次学力試験(後期日程)第1段階選抜合格者数等

| | | | | | | 第1段階選拉 | 友 | 合格 | 者科類別 | 成績 |
|----|------------|----------|----------|----------------|-------|--------|--------------------------|-----|------|--------|
| 科 | 】 類 | 募集 人員 | 志願者 数 | 倍率 | 合格者数 | 不合格者数 | 本学前期日程 合格による 不合格者数 | 最高点 | 最低点 | 平均点 |
| 文科 | 科一類 | 42 | 923 | 22.0 (14.9) | 212 | 414 | 297 | 580 | 549 | 558.07 |
| 文科 | 科二類 | 38 | 672 | 17.7 (10.3) | 197 | 194 | 281 | 488 | 453 | 462.81 |
| 文科 | 科三類 | 53 | 981 | 18.5 (13.4) | 267 | 442 | 272 | 577 | 540 | 551.60 |
| 理和 | 科一類 | 122 | 2,084 | 17.1 (8.7) | 626 | 439 | 1,019 | 500 | 467 | 478.24 |
| 理和 | 科二類 | 59 | 639 | 10.8 (8.3) | 302 | 187 | 150 | 500 | 448 | 465.48 |
| 理和 | 科三類 | 10 | 175 | 17.5 (14.9) | 50 | 99 | 26 | 500 | 487 | 493.12 |
| 合 | 計 | 324 | 5,474 | 16.9 (10.6) | 1,654 | 1,775 | 2,045 | | | |

注:倍率欄の()内は本学前期日程試験合格者数を除いた倍率



研究協力部

東京大学基金による 平成18年度国際交流助成事業の採択 決まる

東京大学基金による平成18年度国際交流助成4事業のうち、「長期派遣経費助成事業」について、以下のとおり助成 することを決定した。なお、「海外学術交流拠点設置・運営経費助成事業」、「東大シンポジウム開催経費助成事業」及 び「ジョイント・フォーラム開催経費助成事業」の採択結果については、既に学内広報で公表済みである。

長期派遣経費助成事業(平成18年度)

| 部局名 | 申請者職・氏名 | | 研究題目 | 派遣先 | |
|-------------|---------|---------|-----------------------------|--------------------|--|
| 大学院理学系研究科 | 助手 | 岩崎 弘典 | エキゾチック核における陽子、中性子物質の非 | オルセー原子核研究所 | |
| 八十九年十六时九州 | 197] | 石門 公共 | 対称性の研究 | (フランス) | |
| | | | 視野を共有しない分散カメラ群を用いた人物行 | カーネギーメロン大学、 | |
| 大学院情報学環 | 助教授 | 佐藤 洋一 | 動計測技術の開発 | Robotics Institute | |
| | | | 到市 (則1又何) ♥ / 刑 光 | (アメリカ) | |
| 大学院情報理工学系 | 助教授 | 五十嵐健夫 | ラプラシアン法による3次元モデルの作成 | ベルリン工科大学 | |
| 研究科 | 助叙技 | 五 風陸大 | ファファン 伝による3 久元モアルV71F版 | (ドイツ) | |
| 生産技術研究所 | 助手 | 鈴木 宏明 | マイクロ・ナノ構造を利用した細胞膜での膜輸 | SCRIPPS研究所 | |
| 生)生(又們)切 先別 | 助手 | 邓小 仏明 | 送現象の定量解析 | (アメリカ) | |



研究協力部

「東京大学稷門賞 | 授賞式を挙行

平成17年度後期「東京大学稷門賞 | の受賞者が下記の とおり、社団法人信託協会様及び旭化成株式会社様、ニ プロ株式会社様、CERESコンソーシアム様の2件4団 体に決定し、3月6日(月)17時から山上会館地階御殿 において授賞式が挙行された。

本表彰は、私財の寄付、ボランティア活動及び援助等 により、本学の活動の発展に大きく貢献した個人、法人 又は団体(現に在籍する本学の教職員及び学生は原則と して対象外)に対し授与するものであり、前期、後期の 年2回行っている。



授賞式の様子



受賞者に贈られる記念品

授賞式においては、選考結果の報告、各受賞者への表 彰状及び記念品の贈呈があり、その後、総長の挨拶、受 賞者からの挨拶が行われた。また、授賞式に引き続き、 レセプションが行われ、受賞関係者と本学関係者との懇 談が和やかな雰囲気の中で行われた。

◎ 受賞者

1 社団法人信託協会会長 上原治也様

授賞理由:大学院法学政治学研究科に「信託法教育研 究基金」として平成10年から毎年継続的に助 成(寄附)し、信託法(関連分野を含む)の 研究が飛躍的に向上し、信託法専門家及び研 究の質において日本一の水準に到達した。ま た、継続的に講義(毎年約100名の学生が聴 講)を提供する体制の構築、世界的な信託法 専門家との交流の基礎を構築するなど研究、 教育、国際交流に多大な貢献をされた。

2 旭化成株式会社 代表取締役社長 蛭田史郎様 ニプロ株式会社 代表取締役社長 佐野實様 CERESコンソーシアム 代表理事 高橋晃様

授賞理由:医科学研究所に「細胞プロセッシング」に 関する寄付研究部門(「細胞プロセッシング 寄付研究部門(平成7~18年度)」)を継続 的に設置するために尽力し、その結果、同研 究所は細胞プロセッシングの基礎研究から本 格的な臍帯血バンクを我が国で初めて立ち上 げ、国内及びアジア各国の指導的な立場を占 めてきた。また同研究所附属病院と協力して 臍帯血移植の推進、特に成人移植の普及など 再生医療研究の発展に寄与された。



受賞者の皆様



環境安全本部

東京大学石綿対策ガイドライン制定

本学では石綿の環境汚染による健康障害を防止することを目的に「東京大学石綿対策ガイドライン」を平成18年3月9日付で制定したのでその概要を紹介する。

石綿使用状況の把握として、学内に存在する石綿に関する情報を可能な限り把握することに努めることとした。環境管理では、石綿による健康障害が学生及び教職員等の方々から発生した場合に正確な曝露情報を提供できることを目指した。

リスクアセスメントでは、現在の科学的根拠に基づき 教職員の方々の石綿による肺がん及び中皮腫等の悪性腫 瘍の生涯での罹患リスクを一万人あたり一人未満とでき るレベルを基準として採用し、さらにリスクを低減する ことに努めることとした。加えて、石綿の状態の確認と 環境測定を組み合わせて先に挙げたリスクのレベルを維 持する監視制度を定めた。健康管理等では、石綿に曝露 されたことのある方に対して健康診断の実施と健康不安 がある方への対応を行うこととした。

ガイドラインが法規制及び社会的要求の変化への対応

を迅速に行えるものとするために、これを補足するもの として「東京大学石綿対策ガイドライン解説」及び「石 綿使用建物及び実験機器等の管理指針」を定めた。

東京大学石綿対策ガイドライン 目次

- 1 はじめに
- 2 定義
- 3 目的
- 4 石綿使用状況の把握
 - 4-1 石綿使用建物等の把握
 - 4-2 石綿含有実験機器等の把握
- 5 環境管理及び作業管理
 - 5-1 環境測定
 - 5-2 リスクアセスメント
 - 5-3 環境管理
 - 5-4 作業管理
- 6 石綿含有実験機器の管理
- 7 安全衛牛教育
- 8 健康管理
 - 8-1 石綿使用建物等の使用者の健康管理
 - 8-2 健康障害発症者の健康管理
- 9 退職した教職員等への対応
 - 9-1 相談窓口の設置
 - 9-2 健康管理
- 10 情報管理
 - 10-1 情報の保管と提供
 - 10-2 情報の公開

東京大学石綿対策ガイドライン等の詳細は下記のホームページを参照してください。

 $http://www.adm.u-tokyo.ac.jp/office/anzeneisei/asubes \\to-guideline.html$

部局ニュース



退職教員の紹介

平成18年3月31日をもって本学を退職される予定の先生方を紹介します。紹介記事及び写真は、ご本人の了解のもと、ご提供いただいたものを掲載します。

大学院法学政治学研究科・法学部

高橋 和之 教授

(本学在職期間 1967年3月~1970年3月、 1984年4月~2006年3月)

1967年3月 法学部卒業

1972年4月 助教授(法政大学)

1981年4月 教授 (同上)

1984年4月 教授(東京大学法学部)

1991年4月 教授(同大学院法学政治学研究科)

所属:法曹養成専攻,公法系

専門分野:憲法学、国法学、情報法

研究内容(代表的な著作や論文等):

『現代憲法理論の源流』

『国民内閣制の理念と運用』

『憲法判断の方法』

『立憲主義と日本国憲法』

『現代立憲主義の制度構想』

大学院医学系研究科・医学部

上野 照剛 教授

(本学在職期間 平成6年4月~平成18年3月)



昭和41年3月 九州大学工学部

卒業

昭和43年3月 同大学院工学研究

科修士課程修了

昭和46年3月 同博士課程単位取

得退学

昭和46年4月 助手(九州大学工学部)

昭和51年5月 助教授(九州大学工学部)

昭和61年3月 教授(九州大学工学部)

平成6年4月 教授(医学部)

平成9年4月 教授(大学院医学系研究科)

所属:生体物理医学専攻·医用生体工学講座·生体情報 学分野 専門分野:生体磁気・脳磁気科学 研究内容(代表的な著作や論文等):

- 1. Ueno, S., Editor, Biomagnetic Stimulation. 1994, New York: Plenum Press.
- 2. Ueno, S., Editor, Biological Effects of Magnetic and Electromagnetic Fields. 1996, New York: Plenum Press.
- 3. Ueno S, Tashiro T, and Harada K: Localized stimulation of neural tissues in the brain by a paired configuration of time-varying magnetic fields. Journal of Applied Physics, 64 (10): 5862-5864, 1988.
- 4. Ueno S and Iwasaka M: Properties of diamagnetic fluid in high gradient magnetic fields. Journal of Applied Physics, 75 (10): 7177-7179, 1994.
- 5. Ueno S: Biomagnetic approaches to studying the brain. IEEE Engineering in Medicine and Biology, 18: 108-120, 1999.

橋都 浩平 教授

(本学在職期間 昭和60年1月~平成4年10月、 平成9年2月~平成18年3月)



昭和46年3月 医学部卒業 昭和57年7月~昭和59年12月

英国バーミンガム 市小児病院に留学

昭和60年7月 講師(医学部) 昭和61年6月 助教授(医学部) 平成4年11月 日本赤十字社医療

日本赤十字社医療センター小児外科

部長

平成9年2月 現職就任

所属:医学部附属病院小児外科、生殖·発達·加齢医学 専攻小児外科学·小児腫瘍学講座

専門分野:小児固形腫瘍の外科的治療、胎児・新生児外科

研究内容(代表的な著作や論文等):

- Emura T, Asashima M, Furue M, Hashizume K. Experimental split cord malformations. Pediatr Neurosurg 36: 229-235, 2002.
- Takayasu H, Motoi T, Kanamori Y, Kitano Y, Nakanishi H, Tange T, Nakagawara A, Hashizume K. Two case reports of childfood liver cell adenomas harboring b-catenin abnormalities. Human Pathol 33: 852-855, 2002.
- 3. Hashizume K, Kanamori Y, Sugiyama M, Ito M, Kamii Y. Successful repair of the esophagus in type-IV laryngo-tracheo-esophageal cleft using interposed jejunum. Pediatr Surg Int, 19: 211-213 2003.
- 4. Kanamori Y, Kitano Y, Hashizume K, Sugiyama M, Tomonaga T, Takayasu H, Egami S, Goishi K, Shibuya K, Kawana Y, Marumo G, Kikuchi A, Kozuma S, Taketani Y, Sekiyama Y. A case of

laryngeal atresia (congenital high airway obstruction syndrome) with chromosome 5p deletion syndrome rescued by ex utero intrapartum treatment. J Pediatr Surg 39: E25-28, 2004.

5. Hashizume K, Kanamori Y, Sugiyama M, Tomonaga T, Nakanishi H. Vascular-pedicled costal cartilage graft for the treatment of subglottic and upper tracheal stenosis. J Pediatr Surg 39: 1769-71, 2004.

若井 晋 教授

(本学在職期間 平成11年8月~平成18年3月)



昭和47年3月 医学部卒業 昭和52年4月~53年3月

助手(医学部)

昭和55年1月 助手(医学部)

昭和56年8月 台湾彰化基督教病

院脳神経外科医長

昭和57年8月 講師(獨協医科大

学)

昭和58年12月 米国国立衛生研究 所研究員

昭和60年12月 講師(獨協医科大学)

平成3年9月 日本基督教海外医療協力会総主事

平成5年9月 とちの木病院脳神経外科医長

平成8年4月 教授(獨協医科大学)

平成11年8月 教授(大学院医学系研究科)

所属:国際社会学講座 国際保健学専攻

国際地域保健学教室

専門分野:脳外科、国際保健

研究内容(代表的な著書や論文等):

- 1. Wakai S: Primary health care projects and social development. Lancet 345:1241.1995
- 2. Wakai S: Access to the Internet. Science 271:1347.1996
- 3. Wakai S: Role of neurosurgeons in Japan. Lancet 349:140,1997
- 4. Wakai S: Surgical treatment for incidentally discovered intracranial aneurysms.

Lancet 1999;353:1975-1976

5. Wakai S: Physicians for peace. Lancet2000;355:1365-1366

大学院工学系研究科・工学部

岡部 洋一 教授

(本学在職期間 昭和47年4月~平成18年3月)



1967年3月 工学部卒業

1969年3月 大学院工学系研究科

修士課程修了

1972年3月 同博士課程修了

工学博士

1972年4月 東京大学講師

1973年5月 同助教授

1989年12月 同教授

1999年4月~2001年3月まで

先端科学技術研究センター長

2000年4月~2002年3月

駒場オープンラボラトリー長併任

2001年4月~2006年3月

情報基盤センター長併任

この間、工学部電気工学科講師、助教授、教育用計算機センター助教授、工学部電子工学科教授、 先端研教授、国際・産学共同センター教授、工学 系研究科超伝導工学専攻教授、工学系研究科電子 工学専攻教授など

所属:電子工学専攻

専門分野:情報デバイス

研究内容(代表的な著書や論文等):

- 1. 岡部洋一, 岡村總吾, "Free-Running, 同期運転, 並列運 転における発振器の安定性, 雑音の解析", 電子通信学 会論文, Vol. 52-B, No.12, Dec 1969, pp. 755-762 (弱非 線形発振器の一般論)
- 2. Y. Okabe, "A model to predict the upper cap-switch field of various capping layers", IEEE Trans. on Magnetics, Vol. MAG-14, No.5, Sep 1978, pp.602-604 (磁気バブル素子の安定化に関する理論)
- 3. H. Tamura, Y. Okabe and T. Sugano, "Josephson single-flux-quantum logic circuits using niobium weak links", Appl. Phys. Lett., Vol. 39, No. 9, Nov 1981, pp.761-763 (始めて動いた単一磁束量子論理回路)
- 4. T. Kouhara and Y. Okabe, "Learning algorithm based on moderationism for multi-layer neural networks", Proceedings of 1993 International Joint Conference on Neural Networks, Vol. 1, Oct. 1993, pp.487-490 (感覚系と運動系を結び付けるニューラルネットワークの学習法の提案)
- 5. K. Matsuura and Y. Okabe, "Selective minimumnorm solution of the biomagnetic inverse problem", IEEE Transactions on Biomedical Engineering, Vol. 42, No. 6, Jun. 1995, pp.608-615 (不良設定問題に対し、 もっとも少い変数解を求める手法)

坂本 功 教授

(本学在職期間 昭和48年7月~平成18年3月)



昭和41年3月 工学部卒業

昭和46年3月 大学院工学系研究

科修了・工学博士

昭和46年4月 建設省建築研究所

研究員

昭和48年7月 助教授(工学部)

平成元年11月 教授(工学部)

平成7年4月 教授(大学院工学

系研究科) (現職)

所属:建築学専攻・建築構造学講座・木造建築学分野

専門分野:建築構造学・耐震構造・木造建築

研究内容(代表的な著書や論文等):

「木造建築を見直す」岩波新書、2000 「地震に強い木造住宅」(単行本)工業調査会、1997 「新版木造建築構法」(単行本、編著)市ヶ谷出版、 2003

篠原 修 教授

(本学在職期間 昭和50年10月~平成18年3月)



昭和43年3月 工学部卒業 昭和46年3月 大学院工学系研究 科修了

昭和61年4月 助教授(農学部)

平成3年6月 現職昇任 所属:社会基盤学専攻 専門分野:景観設計

研究内容(代表的な著書や論文等):

著書:「日本の水系―持続する僕の風景」 鹿島出版会、 1997年

> 「景観用語事典」編、共著、彰国社、1998年 「土木造形家百年の仕事―近代土木遺産を訪ね て」新潮社、1999年

「土木デザイン論」東大出版会、2003年 デザイン指導: JR東日本中央線東京駅高架橋、 津和野川護岸・広場

菅野 幹宏 教授

(本学在職期間 昭和46年2月~平成18年3月)



昭和42年3月 工学部卒業

昭和46年1月 大学院工学系研究 科博士課程2年中 退

昭和48年3月 工学博士(東京大学)

昭和57年7月 助教授(工学部) 平成2年7月 教授(工学部)

所属:マテリアル工学専攻、マテリアル環境講座 専門分野:金属材料学(金属材料の組織制御、特性に及 ぽす不純物の影響解明、水素脆化の解明と防 止)、セラミックス中のガスの挙動

研究内容(代表的な著書や論文等):

- "Effect of a Small Amount of Transition Elements on Annealing Characteristics of Cold-Worked Pure Copper", Trans. JIM, 26 (1985), 69-77.
- 2. "Effect of a Small Addition of Zirconium on Hot Ductility of a Cu-Cr Alloy", Zeit. Metallkunde, 79 (10) (1988), 684-688.
- 3. "Heterogeneous Precipitation of Intermediate Phases on Al3Zr Particles in Al-Cu-Zr and Al-Li-Cu-Zr Alloys", Mater. Trans. JIM, 32 (5) (1991), 445-450.
- 4. "Intergranular Fracture Caused by Trace Impurities in an A;-5.5mass%Mg alloy", Acta materialia, 47

(2002), 3981-3989.

5. "Quantitative evaluation of detection efficiency of the hydrogen microprint technique applied to steel", Corrosion Science, 45 (2003), 1227-1241

矢木 修身 教授

(本学在籍期間:平成12年4月~平成18年3月)



昭和42年3月 農学部卒業

昭和44年3月 大学院農学系研究

科修士課程修了

昭和51年3月 同博士課程修了

農学博士

昭和52年7月 国立公害研究所

(現国立環境研究所) 水質土壌環境

部入所

平成8年5月 国立環境研究所総合研究官 平成12年4月 教授(大学院工学系研究科)

所属:工学系研究科附属水環境制御研究センター

水環境制御分野

専門分野:環境微生物工学

研究内容(代表的な著書や論文等):

微生物を活用する水・土壌環境の保全・修復に関する研究を以下の課題のもとで遂行した。1) 富栄養化現象のメカニズムの解明とその制御、2) 微生物を活用する汚染地下水・土壌のバイオレメディエーション、3) 組換え微生物の環境中における挙動解析、4) 微生物によるダイオキシン類の分解、5) 内分泌撹乱物質の水環境及び土壌環境における挙動と制御、6) 生物学的廃水処理プロセスにおける微生物群集解析、7) 切削油の高効率生物分解、8) 廃衣料からのエネルギーの回収

- 1. Iwai S., A. Yamazoe, R. Takahashi, F. Kurisu, O. Yagi (2005): Degradation of mono-chlorinated dibenzo-p-dioxins by *Janibacter* sp. strain YA isolated from river sediment, Current Microbiol., 51, 353-358.
- 2. Limpiyakorn, T., Y.Shinohara, F.Kurisu, and O.Yagi (2005): Communities of ammonia-oxidizing bacteria in activated sludge of various sewage treatment plants in Tokyo, FEMS Microbiol. Ecology, 54, 205-217.
- 3. 中村明博, 栗栖太, 矢木修身 (2005) : トリクロロエ チレン分解細菌Methylocystis sp. M株の土壌カラム 中における挙動のモデル化に関する研究, 水環境学会 誌、28, 445-450.
- 4. Takamura, Y., T.Yamada, A.Kimoto, N.Kanehama, T.Tanaka, S.Nakadaira and O.Yagi (2004): Growth inhibition of *Microcystis* cyanobacteria by L-lysine and disappearance of natural *Microcystis* blooms with spraying, Microbes Environ, 19, 31-39.
- 5. Okino, S., K.Iwasaki, O.Yagi, H.Tanaka (2002) :

Removal of mercuric chloride by genetically engineered mercury-volatilizing bacterium *Pseudomonas putida* PpY101/pSR134, Environ.Contamin.Toxicol., 68, 712-719.

大学院人文社会系研究科・文学部

宇田川 洋 教授

(本学在職期間 昭和51年4月~平成18年3月)



昭和42年3月 北海道教育大学教 育学部卒業

昭和45年3月 大学院人文科学研 究科修士課程修了

昭和60年8月 助教授(文学部) 平成6年2月 教授(文学部)

所属:考古学

専門分野:東北アジア考古学・ア

イヌ考古学

研究内容(代表的な著書や論文等):

『増補改訂 アイヌ伝承と砦』2005, 北海道出版企画センター

『クマとフクロウのイオマンテ』(編著) 2004、同成社 『アイヌ考古学研究・序論』 2001、北海道出版企画センター

『増補 アイヌ考古学』2001、北海道出版企画センター 『イオマンテの考古学』1989、東京大学出版会

小島 孝之 教授

(本学在職期間:平成6年10月~平成18年3月)



昭和47年3月 文学部卒業 昭和50年3月 大学院人文科学研 究科修士課程修了

平成6年10月 教授(文学部) 平成12年7月~平成14年6月

留学生センター長

所属:日本語日本文学(国文学) 専門分野:中世日本文学

研究内容(代表的な著書や論文等):

『中世説話集の形成』(若草書房)

『沙石集』(小学館)

『宝物集 閑居友 比良山古人霊託』(共著、岩波書店)

『方丈記 宇治拾遺物語』(共著、ほるぷ出版)

『日本人の美意識 第三集』(共著、東京大学出版会) 『撰集抄』(共著、桜楓社) 等

櫻井 万里子 教授

(本学在職期間 平成8年4月~平成18年3月)

昭和41年3月 国際基督教大学教養学部卒業

昭和43年3月 東京教育大学文学部卒業

昭和46年3月 大学院人文科学研究科修士課程修了 平成8年4月 教授(大学院人文社会系研究科) 平成11年 博士(文学)号取得

所属:歷史地理学

専門分野:古代ギリシア史

研究内容(代表的な著書や論文等):

単著『古代ギリシアの女たち』中公新書(1992年) 『古代ギリシア社会史研究』岩波書店(1996年) 『ソクラテスの隣人たち アテナイにおける市民 と非市民』山川出版社(1997年)

共著『ギリシアとローマ』(「世界の歴史」第5巻)中 央公論社(1997年)

編著『古代オリンピック』(橋場弦と共編) 岩波新書 (2004年)

『各国史 ギリシア史』山川出版社(2005年)

田村 毅 教授

(本学在職期間 昭和54年4月~平成18年3月)



昭和43年3月 文学部卒業 昭和46年3月 大学院人文科学研

究科修士課程修了

昭和54年4月 助教授

(教養学部)

昭和59年4月 助教授(文学部) 平成3年12月 教授(文学部)

平成6年4月~平成7年3月

総長補佐

平成8年4月~平成10年3月 評議員 平成11年4月~平成13年3月

大学院人文社会系研究科長·文学部長

所属:フランス語フランス文学

専門分野:19世紀フランス文学(ロマン主義)

研究内容(代表的な著書や論文等):

『ロワイヤル仏和中辞典』

(共編著、1985-2005年、旺文社 全2230頁)

『フランス文学史』

(共著、1995年、東京大学出版会)

『フランスの言語文化』

(共著、2002年、放送大学振興会)

『ネルヴァル全集』

(全6巻、共編著、1997-2003年、筑摩書房)

『ジェラール・ド・ネルヴァル』

(単著、2006年、東京大学出版会)

似田貝 香門 教授

(本学在職期間 平成2年4月~平成18年3月)



昭和42年3月 東京学芸大学卒業 昭和45年3月 大学院社会学研究 科修士課程修了

平成2年4月 助教授(文学部) 平成6年1月 教授(文学部) 平成10年4月~平成11年3月 評議員 平成11年4月~平成13年3月

大学院新領域創成科学研究科長

平成15年4月~平成15年8月 副学長

所属:社会学

専門分野:都市社会学・地域社会学・社会運動論

研究内容(代表的な著書や論文等):

『住民運動の論理』(共編著、学陽書房 1976年)

『社会と疎外』(世界書院、1984年)

『現代都市と地域形成 ―転換期とその社会形態』

(共編著、東京大学出版会、1997年)

『第三世代の大学』

(編著、東京大学出版会、2002年2月)

『ボランティアが社会を変える-支え合いの実践知』 (編著、関西看護出版、2006年3月)

大学院理学系研究科・理学部

太田 俊明 教授

(本学在職期間 平成4年5月~平成18年3月)



昭和41年 理学部卒業

昭和46年 理系大学院博士課程修 了

昭和46年 助手(理学部)

昭和54年 助教授(高エネルギー 物理学研究所)

昭和61年 教授(広島大学) 平成4年 教授(理学部)

平成5年 教授(大学院理学系研究科)

所属:化学専攻物理化学講座 物性化学研究室 専門分野:物性化学、放射光科学、表面科学 研究内容(代表的な著書や論文等):

- 1) 上坪、太田著「シンクロトロン放射」(岩波書店) 2005年
- 2) 太田編著「X線吸収分光法—XAFSとその応用 —| (アイピーシー出版) 2002年
- 3) T.Ohta, "Surface XAFS applied to atomic and molecular adsorbates" in "Chemical applications of synchrotron radiation" edited by T.K.Sham (World Scientific, Singapore, 2002) pp.665-706
- 4) T.Ohta edited, "Chemical applications of synchrotron radiation" J.Electron Spectroscopy and Related Phenomena Vol. 119 (2001)
- 5) T.Ohta, K.Asakura, T.Yokoyama "Application to surface structure analysis" in "Applications of Synchrotron Radiation to Materials Analysis" edited by H.Saisho and Y.Gohshi, Elsevier 1996, p.307-352

小林 昭子 教授

(本学在職期間 昭和47年8月~平成18年3月)



昭和42年3月 理学部卒業 昭和44年3月 大学院修士課程修

昭和47年3月 大学院博士課程修 了

平成5年6月 助教授 平成11年7月 現職

所属:附属スペクトル化学研究セ

ンター

専門分野:分子物性化学

研究内容(代表的な著書や論文等):

- Single-component Molecular Metals with Extended-TTF Dithiolate Ligands: A. Kobayashi, E. Fujiwara and H. Kobayashi, Chem. Rev., 104, 5243-5264 (2004)
- 2. Organic Metals and Superconductors Based on BETS (BETS=bis (ethylenedithio) tetraselenafulvalene): H. Kobayashi, H. Cui and A. Kobayashi, Chem. Rev., 104, 5265-5288 (2004).
- 3. A Three-dimensional Synthetic Metallic Crystal Composed of Single Component Molecules: H.Tanaka, Y.Okano, H.Kobayashi, W.Suzuki and A.Kobayashi, Science, 291, 285-287 (2001).
- 4. Magnetic Field Induced Superconductivity in Two-Dimensional Conductor: S.Uji, H.Shinagawa, T.Terashima, C.Terakura, T.Yakabe,Y.Terai M.Tokumoto, A.Kobayashi, H.Tanaka and H.Kobayashi, Nature, 410, 908-910 (2001).
- Molecular Metals and Superconductors Derived from Metal Complexes of 1,3-Dithiol-2-Thione-4,5-Dithiolate (DMIT): P.Cassoux, L.Balade H.Kobayashi, A.Kobayashi, R.A.Clark and A.E.Underhill, Coord.Chem.Rev., 110, 115-160 (1991)

小林 孝嘉 教授

(本学在職期間 昭和55年4月~平成18年3月)



昭和42年3月 理学部卒業 昭和47年3月 同博士課程修了 昭和47年5月~昭和55年3月

> 理化学研究所理論有機化学研 究室研究員

この間、昭和52年9月〜昭和54年 4月 米国ベル研究所招聘研究員 昭和55年4月〜平成6年1月

助教授 (理学部)

この間、昭和61年4月~昭和63年3月 分子科学研究所 客員助教授兼務

平成6年2月 教授(大学院理学系研究科)

所属:物理学専攻、量子光学講座

専門分野:量子エレクトロニクス、分子物理学

研究内容(代表的な著書や論文等):

- · Primary Processes in Photobiology (Springer-Verlag Berlin Heidelberg,Germany, 1987)
- · Nonlinear Optics of Organics and Semiconductors (Springer-Verlag Berlin Heidelberg, Germany, 1989)
- ・『新・有機非線形光学材料 I 材料開発の最先端-』(編集者:中西八郎、小林孝嘉、中村新男、梅垣真祐、シーエムシー1991年)
- ・『新・有機非線形光学材料 Ⅱ 基礎とデバイス開発-』(編集者:小林孝嘉、梅垣真祐、中西八郎、中村新男、シーエムシー1991年)
- Ultrafast Phenomena XIV (Editors: Takayoshi Kobayashi, Tadashi Okada, Tetsuro Kobayashi, Keith A. Nelson, Sandro De Silvestri, Springer-Verlag Berlin Heidelberg, Germany, 2005)

祖父江 義明 教授

(本学在職期間 昭和57年年1月~平成18年3月)



昭和41年3月 理学部卒業

昭和43年3月 大学院理学研究科 修士課程修了

昭和47年6月 理学博士(東京大学)

昭和57年1月 助教授(東京天文台)

昭和61年4月 助教授(理学部)

昭和63年7月 教授(理学部)

所属:附属天文学教育研究センター

専門分野:電波天文学

研究内容(代表的な著書や論文等):

銀河及び銀河系の構造、星間物質、銀河磁場の研究 Global Structure of Magnetic Fields in Spiral Galaxies

Sofue, Y., Fujimoto, M. and Wielebinski, R. 1986 Annual Review of Astronomy and Astrophysics Vol. 24, 459-497

Rotation Curves of Spiral Galaxies

Sofue, Y. and Rubin, V. 2001

Annual Review of Astronomy and Astrophysics Vol. 39, 137-174

東江 昭夫 教授

(本学在職期間 平成元年5月~平成18年3月)



昭和40年3月 理学部卒業

昭和45年3月 同大学院理学系研究科博士課程修了

昭和56年5月 助教授(広島大学)

昭和61年1月 教授(広島大学) 平成元年5月 教授(理学部) 平成5年4月 教授(大学院理学系研究科)

所属:生物科学専攻植物科学講座遺伝学

専門分野:分子遺伝学

研究内容(代表的な著書や論文等):

Toh-e, A., Tanaka, K., Uesono, Y., and Wickner, R.B. (1988) PHO85, a negative regulator of the PHO system, is a homolog of the protein kinase gene, CDC28, of Saccharomyces cerevisiae. Mol. Gen. Genet. 214: 162-164.

Matsui, Y., and Toh-e, A. (1992) Isolation and characterization of two novel ras superfamily genes in Saccharomyces cerevisiae. Gene 1114: 43-49.

Shirayama, M., Matsui, Y., and Toh-e, A. (1994) The yeast TEM1 gene, which encodes a GTP-binding protein, is involved in termination of M phase. Mol. Cell. Biol. 14: 7476-7482.

Kominami, K., DeMartino, G.N., Moomaw, C.R., Slaughter, C.A., Shimbara, N., Fujimuro, M., Yokosawa, H., Hisamatsu, H., Tanahashi, N., Shimizu, Y., Tanaka, K., and Toh-e, A. (1995) Nin1p, a regulatory subunit of the 26S proteasome, is necessary for activation of Cdc28p kinase of Saccharomyces cerevisiae. EMBO J. 14: 3105-3115

Nishizawa, M., Katou, H., Shirahige, K., and Toh-e, A. (2004) Yeaast Pho85 kinase is required for proper gene expression during the diauxic shift. Yeast 21: 903-918.

山岸 晧彦 教授

(本学在職期間 昭和60年3月~平成2年2月、 平成13年8月~平成18年3月)

昭和42年3月 理学部卒業

昭和44年4月 大学院理学系研究科修士課程修了

昭和45年3月 博士課程途中退学

昭和45年4月 助手(北海道大学)

昭和50年9月 理学博士(東京大学)

昭和60年3月 助教授(教養学部)

平成2年3月 教授(北海道大学)

平成13年8月 教授(大学院理学系研究科)

所属:地球惑星科学専攻 地球生命圏科学講座

専門分野:粘土科学、無機化学、界面化学

研究内容(代表的な著書や論文等):

原子・分子スケールでのミクロなキラリティがマクロな不斉構造をどのように構築するかという点に興味を置いて研究を行ってきた。具体的には、粘土鉱物のような無機層状化合物を取り上げ、それと有機物や金属錯体との相互作用におけるキラリティの役割を調べてきた。

 J. Kameda, A.Yamagishi and T. Kogure, "Morphological characteristics of ordered kaolinite: Investigation using Electron Backscattered Diffusion (EBSD) ", American Mineralogist 90 1462-1465 (2005).

- 2) K. Saruwatari, H. Sato, T., Idei, J. Kameda, A. Yamagishi, A.Takagaki and K.Domen, "Photoconductive properties of organic-inorganic hybrid films of layered perovskite-type niobate", *J. Phys.* Chem. B 109, 12410-1246 (2005).
- 3) H. Sato, Y. Hiroe, K.Tamura and A. Yamagishi, "Orientation Tuning of a Polypyridyl Ru (II) Complex Immobilized on a Clay Surface towards Chiral Discrimination" *J. Phys.* Chem. *B* 109, 18935-18941 (2005) .
- 4) H. Sato, K. Ono, C. T. Johnston and A. Yamagishi, "First-principles studies on the elastic constants of a 1: 1 layered kaolinite mineral", *American Mineralogist* 90, 1824-1826 (2005).
- 5) J. Yoshida, H. Sato, A.Yamagishi and N.Hoshino, "Parity in the helical twisting power of Ru (II) 1,3-diketonate for C₂ symmetry in a nematic liquid crystal", J. Am. Chem. Soc. 127, 8453-8456 (2005).

大学院農学生命科学研究科・農学部

飯塚 堯介 教授

(本学在職期間 1967年6月~2006年3月)



1966年 3 月 農学部卒業 1967年 6 月 助手 (農学部) 1987年 7 月 助教授 (農学部) 1993年 7 月 教授 (農学部)

1996年4月 教授(大学院農学生 命科学研究科)

2002年7月 留学生センター長 所属:生物材料科学専攻 木材化 学研究室

専門分野:木材化学

研究内容(代表的な著書や論文等):

I. Tomoda, Y. Matsumoto, G. Meshitsuka The Role of Alkali-hydrogen peroxide during Pulp Treatment

J. Japan Tappi, 58 (3), 395-401 2004

H. Aimi, Y. Matsumoto, G. Meshitsuka,

Structure of Small Lignin Fragment Retained in Water Soluble Polysaccharide Extracted from Sugi MWL Isolation Residue

Journal of Wood Science, 50 (5), 415-421 2004

Kyoko S. Tatsumata, Hiroyuki Shintani, Gyosuke Meshitsuka

Mechanism of Detoxification of Aluminum Ions by Kraft Lignin Treated with Alkaline Oxygen

J. Wood Sci., 49, 93-99 2003

T. Akiyama, Y. Matsumoto, T. Okuyama, G. Meshitsuka

Ratio of Erythro and Threo Forms of B-O-4

Structures in Tension Wood Lignin

Phytochemistry (64), 1157-1162 2003

Yuehua Xiao, Gyosuke Meshitsuka

Development of Super Water-absorbent from Cellulosic Materials, (4) Porous Structure of Water Absorbent

J. Japan Tappi,56 (8), 1191-1196 2002

小川 博之 教授/附属家畜病院院長

(本学在職期間 1972年8月~1979年1月



1997年4月~2006年3月)

1967年3月 農学部卒業

1972年7月 大学院農学系研究科博士課程単位取得退

学

1972年8月 助手(農学部)

1979年2月 講師(宮崎大学)

1982年6月 助教授(宮崎大学)

1997年4月 教授(大学院農学生 命科学研究科)

所属:家畜病院

専門分野:高度医療科学

研究内容(代表的な著書や論文等):

Ogawa, H., Tu, C. H., Kagamizono, H., Soki, K., Inoue, Y., Akatsuka, H., Nagata, S.

Wada, T., Ikeya, M., Makimura, H., Uchida, K., Yamaguchi, R., Ohtsuka, H. (1997)

Clinical,morphologic,and biochemical characteristics of Chediak- Higashi

syndrome in fifty-six Japanese Black cattle. Am.J.Vet.Res. 58: 1221-1226.

Sasaki, M., Thoyama, K., Matsunaga, S., Nakamura, M., Tomizawa, N., Inoue, T., Ogawa,

H., Ehara, S., Ogawa, A (2004)

MRI identification of dorsal hippocampua homologue in human brain. NeuroReport.

15:2173-2176.

小野 拡邦 教授

(本学在職期間 1994年4月~2006年3月)



1969年3月 農学部卒業

1971年3月 大学院農学系研究科 修士課程修了

1980年11月 同博士課程修了

1994年4月 助教授 (農学部)

1998年7月 教授(大学院農学生 命科学研究科)

所属:生物材料科学専攻 高分子

材料学研究室

専門分野:高分子材料学

研究内容(代表的な著書や論文等):

Y.-C. Zhang, A. Ikeda, N. Hori, A. Takemura, H. Ono

and T. Yamada; Characterization of liquefied product from cellulose with phenol in the presence of sulfuric acid. Bioresource Technol.,97, 313-321 (2006).

Y.-M. Wang, A. Ikeda, N. Hori, A. Takemura, H. Ono, T. Yamada, and T. Tsukatani; N,N-dicyclohexylcarbodiimide Assisted Synthesis and Characterization of Poly (vinyl alcohol-co-vinyl levulinate). Polymer, 46, 9793-9802 (2005).

J. Asahara, A. Takemura, N. Hori, H. Ono, and H. Matsui; Crosslinked acrylic pressure sensitive adhesives. 3. Effect of adherend on film formation. Polymer. 45, 4917-4924 (2004)

T.T. Nge, N. Hori, A. Takemura, H. Ono, and T. Kimura; Synthesis and Orientation Study of a Magnetically Aligned Liquid-Crystalline Chitin/Poly (acrylic acid) Composite. J. Polym. Sci.: Part B: Polym. Physics, 41, 711-714 (2003).

M. Takemoto, M. Kajiyama, H.Mizumachi, A. Takemura, and H. Ono; Miscibility and Adhesive Properties of Ethylene Vinyl Acetate Copolymer (EVA) -Based Hot-Melt Adhesives.I. Adhesive Tensile Strength. J.Appl.Polym.Sci., 83,719-725 (2002).

小林 洋司 教授

(本学在職期間 1987年2月~2006年3月)



1966年3月 農学部卒業

1977年2月 助教授(宇都宮大学)

1982年6月 農学博士

1987年2月 助教授(農学部)

1991年7月 教授(大学院農学生 命科学研究科)

所属:森林科学専攻 森林利用学 研究室

専門分野:森林利用学、森林土木学 研究内容(代表的な著書や論文等):

小林 洋司・仁多見俊夫・有賀 一広・櫻井 倫・杉浦直 重:作業道の路体構造に関する一考察、森林利用学会 誌、19巻4号、283-286, 2005.3

小林 洋司:PUM法による森林資源と環境の利用高度 化に資する森林基盤整備計画手法の開発、森林利用学 会誌、18巻4号、253-256,2004

小林 洋司・桜井 倫: 林道の費用対効果の一考察、森 林利用学会誌、18巻3号、183-188, 2003.12

Hiroshi Kobayashi, Toshimichi Tsumaki and Hiroshi Arai: Development of a large-scaled 6-legged walking robot for weeding on a steep terrain,

Journal of Japan Forest Engineering Society, 19 (2), 41-146, 2004

Oh JaeHeun, Park Bun Jin, Aruga Kazuhiro, Nitami

Tosio, Cha Du Song and Kobayashi Hiroshi:The Whole-body Vibration Evaluation Criteria of Forestry Machines,

Bulletin of the Tokyo University Forests, No.111 25-48, 2004

土井 邦雄 教授

(本学在職期間 1982年4月~2006年3月)

1969年 4 月 農学部卒業

1978年11月 農学博士(東京大学)

1982年4月 助教授(農学部)

1990年6月 教授(農学部)

2003年4月 大学院農学生命科学研究科附属牧場長

(兼任)

所属: 獣医学専攻 獣医病理学研究室

専門分野:獣医病理学

研究内容(代表的な著書や論文等)

Yamauchi H., katayama K., Ueno M., Uetsuka K., Nakayama H., and Doi K. Involvement of p53 in 1- β -D-arabinofuranosylcytosine-induced trophoblastic cell apoptosis and impaired proliferation in rat placenta. Biol.Reproduct., 70:1762- 1767, (2004)

Yamanouchi-Ueno A., Nakayama Y., and Doi K. Characteristics of testicular lesions in mice infected with a low dose of encephalomyocarditis (EMC) virus. Exp.Mol.Pathol., 77:72-76, (2004)

Su W.P., Ikegami H., Nakayama H., Suzuki K., Katayama K., Nakayama H., and Doi K. Susceptibility of primary culture neurons from rats of different ages to encephalomyocarditis (EMC) virus infection. Exp.Mol.Pathol., 75:160-164, (2003)

Shinozuka J. and Doi K. T-2 toxin-induced apoptosis in the mouse lymphoid and hematopoietic tissues. Mycotoxins, 53:129-139, (2003)

Ueno M., Katayama K., Nakayama H., and Doi K. Mechanisms of 5-azacytidine (5AzC) -induced toxicity in the rat fetal brain. Int.J.Exp.Pathol., 83:139-150, (2002)

東條 英昭 教授

(本学在職期間 1991年4月~2006年3月)



1966年3月 広島大学卒業

1972年3月 九州大学大学院農学 研究科博士課程単位 取得満期退学

1991年4月 助教授(大学院農学系研究科)

1997年6月 教授(大学院農学生 命科学研究科)

所属:応用動物科学専攻 応用遺伝学研究室 専門分野:応用遺伝学、動物発生工学 研究内容(代表的な著書や論文等):

著書

東條英昭著、BLUE BACKS 「動物をつくる遺伝子工学」、講談社、東京、(1996)

東條英昭著、シリーズ応用動物科学/バイオサイエンス「トランスジェニック動物」、朝倉書店、東京、(2004)

論文

Yokouchi K, Ito M, Nishino K, Yamanouchi K,Naito K, Suzawa M, Kato S, Hakamata Y,Endo H, Tojo H. Stage-specific regulatory element of mouse Sry gene. Mol. Reprod. Dev.,64:389 396 (2003)

Nukumi N, Ikeda K, Osawa M, Iwamori T, Naito K, Tojo H. Regulatory function of whey acidic protein in the proliferation of mouse mammary epithelial cells in vivo and in vitro. Dev Biol., 274:31-44, (2004) Ito M, Yokouchi K, Naito K, Endo H, Hakamata Y, Miyazaki J, Tojo H.

Detection of elements responsible for stage- and tissue-specific expression of mouse Sry using an in vitro Cre/loxP system.Biochem Biophys Res Commun. 337:264-270 (2005)

宮本 克己 講師

(本学在職期間 1974年2月~2006年3月)

1967年3月 農学部卒業

1974年11月 大学院農学系研究科博士課程修了

1974年2月 助手(農学部)

2002年4月 講師(農学生命科学研究科)

所属:国際交流室 専門分野:緑地学

研究内容(代表的な著書や論文等):

米国ワシントン州シアトル市における開発権移転制度 に関する考察

環境情報科学論文集18.195-200 (2004)

The Transition of the Greenbelt in the National Capital Region.

International Federation of Landscape Architects 10th Eastern Regional Conference 2000 Proceedings Book,101-108 (2000)

ランドスケープ大系第2巻「ランドスケープの計画」 日本造園学会編 技報堂出版 (1998)

市街地の緑地環境構造と計画的整備に関する考察 都市計画学会学術研究論文集16,337-342 (1981)

住宅地における緑地空間の機能・構造に関する計画的 研究

緑地学研究5,1-95 (1976)

八木 宏典 教授

(本学在職期間 1985年10月~2006年3月)



1967年 3 月 農学部卒業 1985年10月 助教授 (農学部) 1995年 6 月 教授 (農学部)

所属:農業·資源経済学専攻 農 業経営学研究室

専門分野:農業経営学

研究内容

(代表的な著書や論文等):

『水田農業の発展論理』日本経済評論社、1983年 『カリフォルニアの米産業』東京大学出版会、1992年 『Vietnamese Agriculture under Market-oriented Economy』(共編著)Agriculture Publishing House、 Hanoi、2001

『農業経営者の時代』(共編著)、日本農業経営年報 創刊号、農林統計協会、2001年

『人間と自然-食・農・環境の展望-』(共編著)、日本放送教育振興会、2003年

『現代日本の農業ビジネス』農林統計協会、2004年

谷田貝 光克 教授

(本学在職期間 1999年4月~2006年3月)



1966年3月 理学部卒業 1971年3月 大学院理学研究科博

1999年4月 教授(大学院農学生 命科学研究科)

士課程修了

所属:農学国際専攻 国際植物材料科学研究室

専門分野:植物材料科学

研究内容(代表的な著書や論文等):

谷田貝光克、生物資源研究シリーズ1 植物抽出成分の特性とその利用、八十一出版 (2006)

谷田貝光克編著、香りの百科事典、丸善(2005) 谷田貝光克、川崎通昭編著、香りと環境、フレグラン スジャーナル社(2003)

Y. Kikuchi, M. Yatagai, 6.The commercial cultivation of Taxus species and production of taxoids, Taxus (The genus Taxus), Ed. H. Itokawa and K-H. Lee (Taylor & Francis), 151-178 (2003)

M. Yatagai, M.Nishimoto, K. Hori, T.Ohira, A. Shibata, Termiticidal activity of wood vinegar, its components and their homologs, J.Wood Sci., 48, 338-342 (2002)

山口 五十麿 教授/生物生産工学研究センター長

(本学在職期間:1972年5月~2006年3月)



1968年3月 農学部卒業

1970年3月 大学院農学系研究科

修士課程修了

1972年5月 同博士課程中退

1972年5月 助手(農学部)

1990年12月 助教授(農学部)

1998年7月 教授(大学院農学生 命科学研究科)

2005年4月 生物生産工学研究センター長

所属:応用生命化学専攻 生物制御化学研究室

/生物生産工学研究センター

専門分野:生物制御化学・天然物有機化学・植物生理化 学

研究内容(代表的な著書や論文等):

Gibberllin insensitive dwarf1 encodes a soluble receptor for gibberellin

Ueguchi-Tanaka M., Ashikari M., Nakajima M., Itoh H., Katoh E., Kobayashi M., Chow T.-Y., Hsing Y-E. C., Kitano H., Yamaguchi I., Matsuoka M.

Nature, 437, 693-698 2005

Similarities and Differences between the characteristics of gibberellin-binding protein and gibberellin 2oxidases in adzuki bean (Vigna angularlis)

Park S.-H., Nakajima M., Hasegawa M., Yamaguci I. Biosci, Biotechnol, Biochem., 69 (8) 1508-1514 2005 Preparation of functional single-chain antibodies against bioactive gibberellins by utilizing randomly mutagenized phage-display libraries

Suzuki Y., Ito S., Otsuka K., Iwasawa E., Nakajima M., Yamaguchi I.

Biosci, Biotechnol, Biochem., 69 (3) 610-619 2005

A dwarf mutant strain of Pharbitis nil, Uzukobito (kobito), has defective brassinosteroid biosynthesis Suzuki, Y., Saso, K., Fujioka, S., Yoshida, S., Nitasaka, E., Nagata, S., Nagasawa, H., Takatsuto, S., Yamaguchi, I.

Plant J., 36, 401-410 2003

Immunohistochemistry of active GAs and GAinducible ?-amylase in developing seeds of Pharbitis

Nakayama A., Park S.-J., Xu Z.-J., Nakajima M. and Yamaguchi I.

PlantPhysiol., 123 (3) 1045-1053 2002.

大学院総合文化研究科・教養学部

伊藤 亞人 教授

(本学在籍期間 昭和45年7月~平成18年3月)



昭和43年3月 教養学部卒業

昭和45年3月 大学院社会学研究

科修士課程修了

昭和45年6月 博士課程中退

昭和45年7月 助手(教養学部)

昭和48年5月 助手(東洋文化研

究所)

昭和54年5月 助教授

(教養学部)

平成2年4月 教授(教養学部)

平成8年4月 教授(大学院総合文化研究科)

平成8年4月~11年3月

文学部付属文化興隆研究施設併任

所属:大学院総合文化研究科超域文化科学専攻

文化人類学コース

専門分野:文化人類学

研究内容(代表的な著書や論文等):

東アジア諸社会の文化人類学、応用人類学、開発人類学 著書・論文:

『読本韓国』(河出書房新社 1996)

『韓国珍島の民俗紀行』(青丘文化社 1996)

Coordination and Brokerage:Leadership in Community Delopment in Rural Korea, Shima & Janelli eds., The Anthropology of Korea, 1998, 157-169)

「産業化の制約要因としての儒教」(松本・服部編『韓 国経済の解剖』、文眞堂、2001、83-113)

「朝鮮における王権の正統性」(網野善彦編『王権と天 皇制を考える』 8、岩波書店 2002、279~311)

小林 寛道 教授

(本学在職期間 昭和61年4月~平成18年3月)



昭和43年3月 教育学部卒業

昭和45年3月 大学院教育学研究

科修士課程修了

昭和45年4月 技官(名古屋大学)

昭和47年4月 助手(名古屋大学)

昭和48年1月 講師(名古屋大学)

昭和56年7月 助教授

(名古屋大学)

昭和61年4月 助教授(教養学部)

平成2年10月 教授(教養学部)

平成8年4月 教授(大学院総合文化研究科)

平成17年4月 教授(兼務)(大学院新領域創成科学研 究科)

> センター長(大学院新領域創成科学研究 科付属生涯スポーツ健康科学研究センタ **—** [)

所属:大学院総合文化研究科広域科学専攻生命環境科学

系身体運動科学研究室・大学院新領域創成科学研 究科付属生涯スポーツ健康科学研究センター

専門分野:スポーツ科学、体力科学、バイオメカニクス、 発育発達

研究内容(代表的な著書や論文等):

- ・「日本人のエアロビックパワー」単著 杏林書院 1982年
- ・「幼児の発達運動学」単著ミネルヴァ書房1990年
- ・「世界一流競技者の技術 第3回世界陸上競技選手 権大会 バイオメカニクス研究班報告書」(監修) ベースボールマガジン社 1994年
- ・「ランニングパフォーマンスを高めるスポーツ動作の創造|単著 杏林書院 2001年
- ・「運動神経の科学~誰でも足は速くなる~」単著 講談社現代新書 2004年

小牧 研一郎 教授

(本学在職期間 昭和46年6月~平成18年3月)



昭和41年3月 教養学部卒業 昭和43年3月 大学院理学系研究 科修士課程修了

昭和44年6月 同博士課程中退 昭和44年6月 助手(教養学部) 昭和55年4月 助教授(教養学部) 平成3年4月 教授(教養学部) 平成7年4月~平成11年3月

原子力研究総合センター長併任

所属:広域科学専攻広域システム科学系・物理部会

専門分野:実験物理学(粒子線物理)研究内容(代表的な著書や論文等):

Direct Measurement of Nuclear Reaction Times by the Use of the Blocking Effect in Single Crystals, Phys. Letters 29B (1969) 414-416.

Channeling Radiation from 350MeV Electrons, Phys. Lett. 98A (1983) 303-305.

Atomic Processes of High Energy Heavy Ions Channeled in a Crystal, Nucl. Instrum. & Methods B135 (1998) 16-24.

Impact Parameter Dependent Resonant Coherent Excitation of Relativistic Heavy Ions Planar Channeled in Crystals, Phys. Rev. Letters 83 (1999) 528-531.

Confinement of a large number of antiprotons and production of an ultraslow antiproton beam, Phys. Rev. Lett. 94 (2005) 023401-1-4.

深川 由起子 教授

(本学在職期間 平成15年4月~平成18年3月)



昭和56年3月 早稲田大学卒業 平成7年5月 米国Yale 大学大

学院修士課程修了

平成11年3月 早稲田大学大学院 商学研究科博士課

程単位取得退学

平成10年4月 助教授(青山学院 大学)

平成15年4月 教授 (大学院総合文化研究科)

平成18年1月 日本学術会議第20期会員

所属:言語情報科学専攻

専門分野:東アジア経済論

研究内容(代表的な著書や論文等):

Korea-Japan FTA: Toward a Model Case for East Asian Economic Integration,

韓国対外経済研究院(KIEP)、2005年

「日本のFTA戦略」、日本経済新聞社、2004年(共著) 「韓国先進国経済論」、日本経済新聞社、1997年

油井 大三郎 教授

(本学在籍期間 平成8年4月~平成18年3月)



昭和43年3月 教養学部卒業 昭和49年3月 大学院社会学研究

得退学

大学)

昭和49年4月 講師(明治大学) 昭和55年4月 助教授(一橋大学) 昭和60年5月 社会学博士(一橋

昭和62年9月 教授(一橋大学)

平成8年4月 教授(大学院総合文化研究科)

平成12年4月~17年3月

大学院総合文化研究科附属 アメリカ太平洋地域研究センター長

所属:アメリカ太平洋地域研究センター、地域文化研究 専攻、地域文化研究学科アメリカ分科、歴史部会

専門分野:米国現代史、現代世界史

研究内容(代表的な著書や論文等):

『戦後世界秩序の形成』(東京大学出版会、1985年)

『未完の占領改革』(東京大学出版会、1989年)

『日米・戦争観の相克』(岩波書店、1995年)

共編著『浸透するアメリカ、拒まれるアメリカ』(東京大学出版会、2003年)

D.Yui/L.Hein eds., Crossed Memories, Center for Pacific and American

Studies, the Univ. of Tokyo, 2003

義江 彰夫 教授

(本学在職機関 昭和52年4月~平成18年3月)



昭和41年3月 文学部卒業

昭和43年3月 大学院人文科学研

究科修士課程修了

昭和46年3月 同博士課程満期

退学

昭和46年4月 助教授

(北海道大学)

昭和52年4月 助教授

(教養学部)

平成2年4月 教授(教養学部)

平成8年4月 教授(大学院総合文科研究科)

所属:超域文化科学専攻

専門分野:日本古代・中世史

研究内容(代表的な著書や論文等):

『鎌倉幕府地頭職域成立史の研究』東京大学出版会 1978年

『日本通史 I 、歴史の曙から伝統社会の成熟へ』山川 出版社 1986年

『神仏習合』岩波書店 1996年、『歴史学視座』校倉書 房 2002年

「摂関家領袖統の研究序説」『史学雑誌』 1967年 「自然破壊を視点に新しい歴史観を」『自然への共鳴』 思索社 1989年

大学院薬学系研究科・薬学部

桐野 豊 教授(理事・副学長)



147年6月~昭和60年9月、

平成5年9月~平成18年3月)

昭和42年3月 薬学部卒業

昭和47年3月 大学院薬学系研究

科博士課程修了

昭和58年10月 助教授(薬学部)

昭和60年10月 教授(九州大学)

平成5年9月 教授(薬学部)

平成9年4月 教授(大学院薬学 系研究科)

平成13年4月~平成16年3月

大学院薬学系研究科長·薬学部長·附属 薬用植物園長

平成16年4月 教授(大学院薬学系研究科)

平成17年4月 理事・副学長

教授兼務 (大学院薬学系研究科)

所属:機能薬学専攻·生体分子機能学講座·神経生物物 理学教室

専門分野:生物物理学

研究内容(代表的な著書や論文等):

Tsuyoshi Inoue, Yasuko Inokuma, Satoshi Watanabe, and Yutaka Kirino, "In vitro study of odor-evoked behavior in terrestrial mollusk", J. Neurophysiol. 91, 372-381 (2004).

Kanako Takatsuki, Shigenori Kawahara, Sadaharu Kotani, Satoshi Fukunaga, Hisashi Mori, Masayoshi Mishina and Yutaka Kirino, "The hippocampus plays an important role in eyeblink conditioning with a short trace interval in glutamate receptor subunit delta 2 mutant mice", J. Neurosci. 23, 17-22 (2003). Satoshi Watanabe, Tsuyoshi Inoue and Yutaka Kirino, "Contribution of excitatory chloride conductance in the determination of the direction of traveling waves in an olfactory center", J. Neurosci. 23, 2932-2938 (2003).

Kaori Takehara, Shigenori Kawahara, and Yutaka Kirino,"Time-Dependent Reorganization of the Brain Components Underlying Memory Retention in Trace Eyeblink Conditioning", J. Neurosci. 23, 9897-9905 (2003).

Yasushi Kishimoto, Shigenori Kawahara, Michiyuki Suzuki, Hisashi Mori, Masayoshi Mishina, and Yutaka Kirino, "Classical eyeblink conditioning in glutamate receptor subunit delta 2 mutant mice is impaired in delay paradigm but not in trace paradigm," Eur. J. Neurosci., 13, 1249-1253 (2001).

大学院新領域創成科学研究科

熊谷 洋一 教授

(本学在職期間 昭和48年12月~平成18年3月)



昭和43年3月 農学部卒業

昭和45年3月 大学院農学系研究

科修士課程修了

昭和48年12月 同博士課程単位取

得退学

昭和62年5月 助教授(農学部)

平成2年1月 教授(農学部)

平成11年4月 教授(新領域創成 科学研究科)

所属:環境学専攻自然環境学大講座自然環境評価学分野 専門分野:造園学、森林科学、自然環境学 研究内容(代表的な著書や論文等):

- 1.「自然環境の変遷と景観予測評価」:大森博雄、 大澤雅彦、熊谷洋一、梶幹男編 自然環境の評価と育成、東京大学出版会 (2005)
- 2. 「景観としての森林」: 鈴木和夫編、森林保護学、朝倉書店(2004)
- 3.「自然景観を楽しむために」:現代幸福論、東京 大学出版会(1997)
- 4. 景観アセスメントにおける予測評価手法に関する 研究、造園雑誌53(1)(1989)

辻 隆之 教授

(本学在職期間 平成11年4月~平成18年3月)



昭和43年9月 医学部卒業

昭和56年10月 助教授(東京医科

歯科大学)

平成5年4月 国立循環器病セン

ター

平成11年4月 教授(新領域創成

科学研究科)

所属:環境学専攻人間環境学大講

座先端医療環境学分野

専門分野:循環器外科、医用工学研究内容(代表的な著書や論文等):

- 1. 深部体温計と心臓外科 (医用電子と生体工学、 Japanese journal of medical electronics and biological engineering:14:220-224;1976.6)
- 2. ホローファイバー人工肺の開心術100例使用経験、 およびその他への臨床応用(人工臓器;10; 167;1981)
- 3. 27,臨床用アパタイト皮膚インターフェイスの開発 (The Society of medical Instrumentation; 56; 180; 1986)
- 4. 心臓マッサージチョッキシステムの開発、基礎的 検討(循環器病研の進歩;19;136-140;1998)
- 5. 55.液相型EVAL人工肺によるECMOシステムの 開発 (The journal of medical Instrumentation; 57;96-97;1987)

渡邉 達三 教授

(本学在職期間 昭和51年11月~平成18年3月)



昭和41年3月 農学部卒業

昭和43年3月 大学院農学系研究

科修士課程修了

昭和46年12月 同博士課程修了 昭和51年11月 助教授(農学部)

平成7年6月 教授(農学部)

平成11年4月 教授(新領域創成

科学研究科)

所属:環境学専攻自然環境学大講座自然環境形成学分野 専門分野:緑地環境形成学

研究内容(代表的な著書や論文等):

- ・街路におけるコミュニティ・オープンスペースとしての機能の形成 市中取締にみられる江戸を例に一. 都市計画論文集, No.31, 121-126, 1996
- ・世論調査にみられる近年の国民の緑意識の動向について. ランドスケープ, 60 (5),437-440, 1996
- ・オープンスペースとしての河川のイメージ,利用欲求,整備等に関する世論の動向について.都市計画論文集,34,535-540,1999
- ·造園学(共著). 朝倉書店, pp.304.1996
- ・緑の環境設計(共編著):NGT, pp.800,2000

大学院情報理工学系研究科

青山 友紀 教授

(本学在職期間 平成9年4月~平成18年3月)



昭和42年3月 工学部卒業

昭和44年3月 大学院工学系研究

科修士課程修了

昭和44年4月 日本電信電話公社

入社

昭和46年10月 同画像通信研究部

画像通信研究室研

究主任

昭和48年8月 マサチューセッツ工科大学 (MIT) 客員 研究員 (1年間)

昭和50年2月 横須賀電気通信研究所研究専門調査員

平成6年7月 同理事 光エレクトロニクス研究所長

平成7年7月 同理事 光ネットワークシステム研究所 長

平成9年4月 教授(大学院工学系研究科)

平成13年4月 教授(大学院情報理工学系研究科)

所属:情報理工学系研究科電子情報学専攻、情報メディ ア学講座

専門分野:情報通信ネットワーク工学

研究内容(代表的な著書や論文等):

著書:ネットワーキング技術 (監修) オーム社、平成 14年

MPLSとフォトニックGMPLS (監修) オーム社、平成15年

論文: H. Morikawa and T. Aoyama, "Realizing the Ubiquitous Network: the Internet and Beyond," Telecommunication Systems, vol.25, no.3-4, pp.449-468, March/April 2004 青山、"ネットワークの進化とIP技術、"電子情報通信学会誌、vol. 83, no.4, pp. 248-256, April 2000

岡部 靖憲 教授

(本学在職期間 昭和52年4月~昭和59年3月



■ 平成5年10月~平成18年3月)

昭和42年3月 理学部卒業

昭和44年3月 理学系大学院修士

課程修了

昭和44年4月 助手(大阪大学)

昭和47年10月 講師(名古屋大学)

昭和54年4月 講師(理学部)

昭和54年7月 助教授(大阪大学)

昭和59年4月 教授(北海道大学)

平成5年7月 工学部 併任

平成5年10月 教授(工学部)

平成6年4月 教授(大学院工学系研究科)

平成13年4月 教授(大学院情報理工学系研究科)

所属:数理情報学専攻·数理情報学専攻原論大講座·確 率論 専門分野:確率過程論、時系列解析、金融工学 研究内容(代表的な著書や論文等):

- 1. The resolution of an irregularity of boundary points in the boundary problem for Markov processes, J.Math.Soc. Japan. 22 (1970), 47-104
- 2. Stationary Gaussian processes with Markovian property and M. Sato's hyperfunctions, Japanese J, Math., 41 (1973), 69-122
- 3. On KMO-Langevin equations for stationary Gaussian processes with T-positivity, J. Fac. Sci. Univ. Tokyo, Sec.IA. Math., 33 (1986), 1-56
- 4. On a non-linear prediction problem for one-dimensional stochastic processes, Japan. J. of Mathematics, 21 (2001), 51-112
- 5. 実験数学―地震波、オーロラ、脳波、音声の時系列解析―、2005年11月、朝倉書店

小柳 義夫 教授

(本学在職期間 昭和46年4月~昭和48年8月



平成3年4月~平成18年3月) 昭和41年3月 理学部卒業

昭和46年3月 同大学院理学系研

究科博士課程修了 理学博士

昭和46年4月 助手(理学部) 昭和48年9月 助手(高エネルギ

-物理学研究所)

昭和53年8月 講師(筑波大学)

昭和57年12月 助教授(筑波大学)

昭和63年3月 教授(筑波大学)

平成3年4月 教授(理学部)

平成13年4月 教授(大学院情報理工学系研究科)

平成16年4月~平成17年3月

情報理工学系研究科副研究科長

所属:コンピュータ科学専攻

専門分野:並列処理、数値解析、計算物理学

研究内容(代表的な著書や論文等):

「最小二乗法による実験データ解析」

(東京大学出版会、昭和57)

「SALS入門-実験データの解析」

(東京大学出版会、平成2)

「工学における数値シミュレーション」

(丸善、昭和63)

"Mathematical Software for the P.C. and Workstations" (North Holland, 1994)

大学院情報学環・学際情報学府

花田 達朗 教授

(本学在職期間 平成4年4月~平成18年3月)



昭和46年3月 早稲田大学卒業 昭和55年7月 ミュンヘン大学大

> 学院コミュニケー ション学 (新聞学) 研究専攻修士課程 修了

昭和61年4月 同博士課程退学 平成4年4月 助教授(新聞研究所)

(平成4年4月10日社会情報研究所へ改組) 平成7年4月 教授(社会情報研究所) 平成15年4月~平成16年3月 社会情報研究所長 平成16年4月~平成18年3月 大学院情報学環長 (平成16年4月1日大学院情報学環へ組織換え)

所属:社会情報学圏・ジャーナリズムメディア学域・公 共メディア領域

専門分野:メディア研究、ジャーナリズム研究、社会学研究内容(代表的な著書や論文等):

『公共圏という名の社会空間-公共圏、メディア、市 民社会』(単著)、木鐸社

『メディアと公共圏のポリティクス』(単著)、東京大 学出版会

『カルチュラル・スタディーズとの対話』(共編)、新曜社

『論争 いま、ジャーナリスト教育』(共編)、東京大学出版会

『実践ジャーナリスト養成講座』(共編)、平凡社 『社会情報学ハンドブック』(共編)、東京大学出版会

原 洋之介 教授

(本学在職期間 昭和47年4月~昭和53年3月、



昭和54年4月~平成18年3月) 昭和42年3月 農学部卒業

昭和47年3月 大学院農学系研究

科博士課程単位取

得退学 昭和47年4月 助手(東洋文化研

究所)

昭和54年4月 助教授(東洋文化 研究所)

昭和63年9月 教授(東洋文化研究所)

平成10年4月~平成15年3月 東洋文化研究所長 平成14年4月 教授(大学院情報学環·東洋文化研究所 併任)

所属:情報学環社会情報専攻、東洋文化研究所汎アジア 部門経済・統計

専門分野:経済発展論、情報の経済学、農業経済学研究内容(代表的な著書や論文等):

『クリフォード・ギアツの経済学 アジア研究と経済 学の間で』リブロポート 1986年 『東南アジアの経済発展 開発主義的政策体系と社会の反応』東洋文化研究所研究報告 1994年 『現代アジア経済論』岩波書店 2001年 『開発経済論 第2版』岩波書店 2002年 『「農」をどう捉えるか 市場原理主義と農業経済原論』 書籍工房早山 2006年

地震研究所

工藤 一嘉 助教授

(本学在職期間 昭和43年4月~平成18年3月)



昭和41年3月 東京学芸大学卒業 昭和43年3月 東北大学理学研究 科修士課程修了

昭和43年4月 助手(地震研究所) 平成5年6月 講師(地震研究所) 平成6年10月 助教授(地震研究所)

所属:地震火山災害部門 専門分野:強震動地震学

研究内容(代表的な著書や論文等):

Kudo, K., T. Kanno, H. Okada, O. Ozel, M. Erdik, T. Sasatani, S. Higashi, M. Takahashi and K. Yoshida, Sitespecific issues for strong ground motions during the Kocaeli, Turkey, earthquake of 17 August 1999, as inferred from array observations of microtremors and aftershocks, Bull. Seismol. Soc. Am., 92, 448-465, 2002.

Kudo, K., Practical estimate of site response - State of the Art report -, Proc. Fifth Intern. Conf. on Seismic Zonation, 3, 1878-1907, 1996.

Kudo, K., M. Sawada, M. Sakaue, T. Miyazaki and S. Oshima, Volcanic tremor associated with the 1989 submarine eruption off Ito, Japan, J. Phys. Earth, 39, 27-45, 1991. 工藤一嘉(共著)、地震による地盤の振動と地震災害、「地震の事典」、初版・第2版、1987・2001.

Kudo, K., A Study on the contribution of surface waves to strong ground motions, Proc. Seventh World Conf. on Earthq. Eng., 2, 499-506, 1980.

社会科学研究所

田端 博邦 教授

(本学在職期間 昭和47年4月~平成18年3月)



昭和42年3月 早稲田大学卒業 昭和47年3月 同大学院法学研究 科博士課程退学

昭和47年4月 助手(社会科学研究所)

昭和51年3月 助教授(社会科学研究所)

平成2年4月 教授(社会科学研究所)

所属:比較現代法部門·産業関係法分野

専門分野: 労働法

研究内容(代表的な著書や論文等):

- 1 「福祉国家論の現在」社会科学研究所編『転換期の 福祉国家(上)』1988年
- 2 「現代日本社会と労使関係」社会科学研究所編『現 代日本社会5』1991年
- 3 「生産方式の変化と労使関係」社会科学研究所編 『20世紀システム5』 1998年
- 4 Community and Efficiency in the Japanese Firm, Social Science Japan Journal, Vol.1, Number 2, 1998

生產技術研究所

今井 秀樹 教授

(本学在職期間 平成4年12月~平成18年3月)



昭和41年3月 工学部卒業 昭和43年3月 大学院工学系研究 科修士課程修了

昭和46年3月 同博士課程修了 平成4年12月 教授(生産技術研 究所)

所属:情報・エレクトロニクス系部 門 情報ネットワーク分野

専門分野:情報セキュリティ、符号理論 研究内容(代表的な著書や論文等):

- (1) H.Imai and S.Hirakawa: "A new multilevel coding method using error-correcting codes," IEEE Transactions on Information Theory, vol.IT-23, 3, pp.371-377 (1977-05)
- (2)河野隆二,今井秀樹,羽鳥光俊:"非同期SSM Aにおける他局間干渉の除去方式について"電子 通信学会論文誌(A),vol.J66-A, no.5, pp.416-423 (1983-05)
- (3) H.Imai and T.Matsumoto: "Algebraic methods for constructing asymmetric crypto-systems," LNCS229, AAECC-3: J.Calmet ed., Springer-Verlag, pp.108-119 (1986)
- (4) 今井秀樹(単著):"情報理論"昭晃堂(1984)
- (5) **今**井秀樹 (単著) : "符号理論" 電子情報通信学会 (1990)

増沢 隆久 教授

(本学在職期間 昭和46年4月~平成18年3月)



昭和41年3月 工学部卒業

昭和43年3月 大学院工学系研究

科修士課程修了

昭和46年3月 同博士課程修了 昭和46年11月 助教授(生産技術

研究所)

昭和60年8月 教授(生産技術研

究所)

所属:マイクロメカトロニクス国際研究センター マイ クロ・ナノ領域解析分野

専門分野:マイクロ加工・計測工学 研究内容(代表的な著書や論文等):

- (1) Wire Electro-Discharge Grinding for Micro-Machining (T.Masuzawa, M.Fujino, K.Kobayashi, T. Suzuki): Annals of the CIRP, 34/1 (1985) 431-434
- (2) Vibroscanning Method for Nondestructive Measurement of Small Holes (T. Masuzawa, Y. Hamasaki, M. Fujino): Annals of the CIRP 42/1 (1993) 589-592
- (3) Micro-EDM for Three-Dimensional Cavities, Development of Uniform Wear Method (Z.Y. Yu, T. Masuzawa and M. Fujino): Annals of the CIRP, 47/1 (1998) 169-172
- (4) やさしいマイクロ加工技術(増沢隆久): 日刊工 業新聞社(2000)
- (5) State of the Art of Micromachining (T. Masuzawa): Annals of the CIRP, 49/2 (2000) 473-488

史料編纂所

酒井 信彦 教授

(本学在職期間 昭和45年4月~平成18年3月)



昭和42年3月 文学部卒業

昭和45年3月 大学院人文科学研

究科修士課程修了

昭和59年4月 助教授

(史料編纂所)

平成11年8月 教授

(史料編纂所)

所属:中世史料部門

専門分野:日本中近世史・朝廷の儀礼、現代日本の歴史 意識

研究内容(代表的な著書や論文等):

『歌会始と和歌披講』(共著、笠間書院、2005年) 「和歌御会始の成立」(『日本歴史』585号、1997年) 『偽善に酔い痴れる日本人』(単著、国民会館、1993年) 「チベット問題入門」上・中・下(拓殖大学『海外事情』1989年)

分子細胞生物学研究所

鶴尾 隆 教授

(本学在職期間 昭和47年4月~昭和52年3月



平成元年5月~平成18年3月)

昭和42年3月 薬学部卒業

昭和47年3月 大学院薬学研究科

博士課程修了

昭和47年4月 助手(薬学部)

昭和52年4月 (財) 癌研究会・

研究員

昭和58年10月 (財) 癌研究会· 主任研究員

昭和61年7月~現在 (財) 癌研究会・部長

平成元年5月 教授(応用微生物研究所)

平成5年4月 教授(分子細胞生物学研究所)

平成11年4月~平成15年3月

分子細胞生物学研究所·所長

所属:分子機能·形成大部門 細胞增殖研究分野 専門分野:癌化学療法(抗癌剤開発、耐性、転移研究)、

生化学、細胞生物学

研究内容(代表的な著書や論文等):

Tsuruo T, Iida H, Tsukagoshi S, Sakurai Y. Overcoming of vincristine resistance in P388 leukemia in vivo and in vitro through enhanced cytotoxicity of vincristine and vinblastine by verapamil.

Cancer Res. 41: 1967-1972, 1981.

Tsuruo T, Iida H, Tsukagoshi S, Sakurai Y. Increased accumulation of vincristine and adriamycin in drug-resistant P388 tumor cells following incubation with calcium antagonists and calmodulin inhibitors.

Cancer Res. 42: 4730-4733, 1982.

Hamada H, Tsuruo T. Functional role for the 170- to 180-kDa glycoprotein specific to drug-resistant tumor cells as revealed by monoclonal antibodies.

Proc Natl Acad Sci U S A. 83: 7785-7789, 1986.

Sato W, Fukazawa N, Nakanishi O, Baba M, Suzuki T, Yano O, Naito M, Tsuruo T. Reversal of multidrug resistance by a novel quinoline derivative, MS-209. Cancer Chemother Pharmacol. 35: 271-277, 1995.

Tsuruo T, Naito M, Tomida A, Fujita N, Mashima T, Sakamoto H, Haga N. Molecular targeting therapy of cancer: drug resistance, apoptosis and survival signal. Cancer Sci. 94: 15-21, 2003.

海洋研究所

乙部 弘隆 専任講師

(本学在職期間 昭和42年8月~平成18年3月)



昭和42年3月 東京理科大学卒業 平成17年1月 講師 (海洋研究 所)

所属:国際沿岸海洋研究センター 沿岸生態分野

専門分野:海洋物理学、 海洋気象学

研究内容(代表的な著書や論文等):

Otobe, H., T. Nakai and A. Hattori (1983): Heat energy exchange across the sea surface of the

Bering Sea and the northern North Pacific in summer, Deep-Sea Research, 30, 1023-1031.

Otobe, H. and T. Asai (1985): Heat balance of the upper ocean under a Land and Sea Breeze in Sagami Bay in summer. Jour. Oceanogr. Soc. Japan, 41, 299-306.

Otobe H. (1989): Radiation balance and heat budget at the ocean/atmosphere interface in the western North Pacific. Jour. Oceanogr. Soc. Japan, 45, 134-153

Otobe, H., K. Taira, S. Kitagawa, T. Asai and K. Hanawa (2003): Variability of upper ocean heat balance in the Shikoku Basin during the Ocean Mixed Layer Experiment (OMLET), J.Oceanogr., 59, 619-627.

乙部弘隆(2005):海水の流れとその特徴、「三陸の海 と生物、宮崎信之編」、サイエンチィスト社, 7-22.

蓮本 浩志 専任講師

(本学在職期間 昭和42年7月~平成18年3月)



昭和42年3月 東海大学海洋学部 資源学科卒業

平成17年1月 講師(海洋研究所) 所属:海洋科学国際共同研究セン ター企画情報分野

専門分野:海洋環境動態解析、海 洋生物学、海洋工学

研究内容(代表的な著書や論文等):

- Otake, T., T.Inagaki, H.Hasumoto, N.Mochioka and K.Tukamoto (1998): Diel vertical distribution of Anguilla japonica leptocephali. Ichthyological Researchi. Vol. 45, No. 2, 208-211. figs. 1-2.
- Nozaki, Y., Dia-Sotto Alibo, T.Gamou and H. Hasumoto (1999): Dissolved rare earth element and hydrography in the Sulu Sea. Geochimica et Cosmochimica Acta. Vol. 63, No15. 2171-2181. 1999
- 3. Tsukamoto.K., T.Otake, N.Mochioka, T.W.Lee, H.Fricke, T.Inagaki, J.Aoyama, S.Ishikawa,S.kimura, M.Miller, H.Hasumoto, M.Oya and Y.Suzuki (2003): Seamount, new moon and eel spawning: The search for spawning site of the Japanese eel. Environmental Biology of Fishes 66: 221-229. 2003
- 4. Toshitaka Gamo, H.Masuda, T.Ymanaka, K.Okamura, J.Ishibasi, E.Nakayama, H.Obata, K.Shitasima, Y.Nishio, H.Hasumoto, M.Watanabe. K.Mitsuzawa, N.Seama, U.Tunogai F. Kouzuma and Y.Sano (2004): Discovery of a new hydorothermal venthing site in the southernmost Mariana Arc: AL-rich hydrothermal plumes and white smoker activity associated with biogenic methane. Geochemical journal. 38.pp. 527-534.
- 5. Hasumoto.H., T.Imazu, T.Miura and K.Kogure (2006):

An applicability of oxygen sensor to mesurment of dissolved oxygen in the ocean. Jour. Oceanogr. Soc. Japan. Vol.62, No.1.99-103

総合研究博物館

大場 秀章 教授

(本学在職期間 昭和48年6月~平成18年3月)



昭和44年3月 東京農業大学卒業 昭和56年11月 助教授(総合研究 資料館)

平成8年5月 教授(総合研究資 料館)

所属:研究部 キュラトリアル・ ワーク研究系

専門分野:植物分類学

研究内容(代表的な著書や論文等):

『Himalayan Plants, vol. 1-3』東京大学出版会(1988-99)

『ヒマラヤを越えた花々』岩波書店(1999)

『シーボルトの21世紀』(編著) 東京大学出版会、(2003)

『大場秀章著作選I·II』八坂書房(2006)

田賀井 篤平 教授

(本学在職期間 昭和 48年7月~昭和53年10月、



昭和56年2月~平成18年3月) 昭和42年3月 理学部卒業

昭和47年3月 大学院理学系研究 科博士課程修了

昭和60年4月 助教授(理学部) 平成10年4月 教授(総合研究博 物館)

所属:研究部

博物資源開発研究系

専門分野:バイオ鉱物学

研究内容(代表的な著書や論文等):

田賀井篤平編著『和田鉱物標本』、東京大学出版会、 P135 (2001)

田賀井篤平編著『クランツ鉱物・化石標本』、東京大 学出版会、P121 (2002)

田賀井篤平編著『ニュートリノ』、東京大学出版会、 P120 (2003)

田賀井篤平編著『石の記憶-ヒロシマ・ナガサキ』、東京大学出版会、P243 (2004)

部局

大学院総合文化研究科・教養学部

駒場 I キャンパスで研究科長と 留学生の懇談会開催される

1月25日(水)18時半から、駒場 I キャンパスの生協 食堂にて「平成17年度総合文化研究科長・教養学部長な らびに数理科学研究科長と外国人留学生との懇談会」が 開催された。

この催しは駒場 I キャンパスの教職員と駒場で学ぶ留学生とが一堂に会し、懇談を通じて、相互理解を深めることを目的として毎年開かれているものである。

当日は、学部学生にとっては試験期間直前であったにもかかわらず、大勢の参加があり、大学院学生、チューターや教職員あわせて150人を超す盛会となった。

懇談会は、久保田俊一郎教養学部国際交流・留学生委員会委員長の開会の挨拶で始まり、木畑洋一総合文化研究科長・教養学部長と桂利行数理科学研究科長の挨拶の後、総合文化研究科山本泰副研究科長の乾杯でにぎやかな懇談が始まった。

昨年にひきつづき、今年も生協の協力を得て、会場で は餅つきが行われた。留学生が次々に参加し、始めての 体験を愉しんだ後は、皆でつきたての餅をほおばりなが ら交流の輪を拡げることができた。

懇談中、理科一類1年の銭韜君が中国歌謡を披露、大いに喝采を博した。

懇談会はなごやかな雰囲気のうちに、総合文化研究科 小島憲道副研究科長の閉会の挨拶をもって20時に閉会し た。



餅つきをして記念撮影



大学院教育学研究科・教育学部

附属中等教育学校で卒業式が 行われる

3月10日(金)に教育学部附属中等教育学校において 平成17年度の卒業式が行われた。中等教育学校になって 6年間を過ごした1期生(55回生)の卒業生108名が巣 立っていった。本学の西尾茂文副学長、佐藤学教育学部 長、西田睦海洋研究所副所長など多くの来賓の方々にも ご臨席いただいた。

汐見稔幸校長は、「学生時代に悩んだこと、考えたこと、がんばったことの延長上に自分の追究したいテーマが必ずあるので、今を大切に過ごしてほしい」と話し、西尾茂文副学長は、小宮山宏総長の本学入学式の言葉「①本質を捉える知②先頭に立つ勇気③他者を感じる力」を紹介した。

佐藤学教育学部長は老人ホームで作曲活動を行う作曲家を例に、理論と知識を持つことと自由な精神を持つことが大切なので、学校で学んだことを様々に利用して、しなやかにさわやかに生きてほしいと話をされた。



謝辞を述べる西尾茂文本学副学長



大学院教育学研究科・教育学部

留学生見学旅行・懇談会開催さる

(懇談会)

1月18日 (水)、山上会館談話ホールにて教育学研究 科の留学生懇談会が行われた。留学生をはじめ、その家 族、日本人チューター、教職員など70余名が集まり、大 いに盛況であった。

佐藤学研究科長は挨拶の中で、アジアの国々との交流がいかに大切であるかを強調され、金子副研究科長は簡潔に引き締まった乾杯の音頭をとって、会は勢いよく賑やかに始まった。

また今回初めて、日頃ご支援いただいているボランティアの方々をお招きした。日本語指導やホームステイなど、本研究科の留学生たちは様々な場面において、多くのボランティアの方々に支えられている。その皆様にお越しいただいて、お話をうかがうことができた。

たとえば、一昨年帰国した元留学生に再会するためミャンマーを訪問されたボランティアの方は、同国の大学事情に関して、興味深い話をして下さった。帰国後も疎遠になることなく人的ネットワークが広がってゆくお話は、参加者に大きな喜びをもたらした。



家族と一緒に

その後、「留学生見学旅行」の写真スライド上映が行われ、留学生やチューターたちが愉快な解説を加えながら、充実した秋の一日の報告をした。



留学生旅行の思い出を披露する

(見学旅行)

この秋の「留学生見学旅行」。本研究科の恒例行事であって、今年度は、晴天に恵まれた10月28日(金)、38名の参加者があった。



鎌倉大仏の前で

「鎌倉への日帰りバス旅行」といえば、円覚寺、建長寺、鶴岡八幡宮、鎌倉大仏というお決まりのコースになるのだが、その散策を十分に堪能した後に今年度は特別企画が用意されていた。

「狂言鑑賞教室」。鎌倉市長谷の(財)『鎌倉能舞台』 において私達だけのために和泉流狂言「仏師」の特別舞 台が用意されるという特別企画であった。

加えて、上演の前後には観世流能楽師の中森昌三氏が 能・狂言について解説して下さり、初めての者には実に ありがたい機会となった。

ほとんどの留学生は「狂言」の鑑賞は始めてであったが、違和感なく集中して見入っていた。その台詞のすべてが「分かった」わけでないのは私たち日本語を母語とする者も同じである。しかし、単なる言語の理解を超えた、より繊細な文化の呼吸に触れ、その舞台芸術の「間合い」を直接肌で感じたことが、留学生たちにとって貴重な体験であったことは間違いない。



鎌倉能舞台

「数百年前に書かれた狂言のせりふが6割方わかって嬉しい」「能や歌舞伎など日本の伝統芸能全般に興味が持てた」帰路のアンケートの中には、そのような感想が多数寄せられていた。

こうした伝統芸能鑑賞の機会を留学生たちに提供する ことも、重要な学習援助であるとあらためて確認する経 験であった。

医科学研究所

部局

地域連携型の消防訓練が実施される

医科学研究所では、3月3日(金)14時から春の火災 予防運動の一環として、高輪消防署の協力のもとに、地域の消防団、町会、自治会等との連携による地域連携型 総合防災訓練が実施された。

この防災訓練は「東京地方に震度7の地震が発生して研究所内の数箇所から出火、地域住民が多数負傷し、附属病院に搬送された」という想定のもと、行われたものである。

第1ステージでは、地震時の火災発生の消防署への通報及び研究所内への連絡、自衛消防隊による消火活動、



一斉放水訓練の様子

避難誘導、1号館4階屋上から逃げ遅れた者をはしご車2台で救助するという訓練、消防団も加わってのはしご車2台、ポンプ車2台、屋内消火栓による一斉放水訓練が行われた。

第2ステージでは、地震による家屋の倒壊等で多数負傷した地域住民に対する特殊救急車(スーパーアンビュランス)・非常用の膨張テント等の設置、附属病院の医師・看護師等医療チームおよび高輪消防署救急隊との連携による負傷者のトリアージ訓練が行われた。

トリアージ訓練は、地域住民が模擬負傷者として担架等により搬送されてくるという設定で、本番さながらの緊張感の中で行なわれた。この訓練は、教職員及び消防署、地域住民、女性防火の会、東京消防ボランティア約450名が参加するという大規模なものであった。



トリアージ訓練の様子

訓練終了後、高輪消防署長からの講評、山本所長および岩本病院長からの「研究所防災に対する心構え」について挨拶があり、15時05分に訓練は無事終了した。

訓練終了後に、震度7強までの揺れを段階的に体験できる「起震車」、火災時と同様の煙を体験できる「煙体験ハウス」、はしご車の搭乗等の体験訓練が行われた。研究所教職員、地域住民等多くの参加者は、この有意義な模擬体験を通して、突然の災害への心構えを新たにしていた。



挨拶を行う所長



「煙体験ハウス」

| 部局 |

社会科学研究所

社会科学研究所附属 日本社会研究情報センター創立 10周年記念シンポジウムを開催

平成18年3月8日(水)午後から、山上会館において本研究所附属日本社会研究情報センターの創立10周年を記念してシンポジウムを開催した。

日本社会研究情報センターの活動の柱は、民間調査機関や大学等の研究者が実施した調査の個票データを収集したSSJ(Social Science Japan)データアーカイブである。それは社会科学のための貴重な資源を保管・収集する役割を果たすだけでなく、二次分析を希望する研究者に個票データの提供を行っている。



シンポジウム会場

このたび、創立10周年を迎えるにあたり「社会科学研究所とSSJデータアーカイブ」と題し、今後のデータアーカイブのあり方についてシンポジウムを開催した。

当日は約70名の参加者があり、第一部では、本研究所 佐藤朋彦助教授から「SSJデータアーカイブの現状と課 題」について、その他、平尾桂子上智大学助教授、嶋崎 尚子早稲田大学教授、稲葉昭英東京都立大学助教授、岩 井八郎京都大学教授の各氏からデータアーカイブに関わ る貴重な報告が行われた。



パネルディスカッションの様子

また、第二部は第一部の報告者をパネリストとし、佐藤博樹本研究所教授をコーディネーターとするパネルディスカッションが行われ活発な意見交換が行われた。

シンポジウム終了後、本研究所大会議室において他大 学等の研究者も含め多数の参加を得、和やかなうちに懇 親会が行われた。

史料編纂所



日露関係史料をめぐる国際研究集会 を開催

3月2日(木)、史料編纂所(保立道久所長)と日本学士院の共催による「日露関係史料をめぐる国際研究集会2006」が開催された。この研究集会は、18~19世紀の日露関係史について、双方に残された史料の具体的分析を通じて明らかにする目的で数年前に開始された。すでにこれまであまり知られて来なかったロシア側史料の調査・解明にも大きな成果をあげてきた。

今回の研究集会では、ロシア連邦サンクトペテルブル グ市から3名の専門家を招聘し、日本側報告者をまじえ て4本の報告がおこなわれた。

ロシア国立歴史文書館ソコロフ館長は、1862年にロシアを訪問した幕府の竹内使節団の応接に関する史料について論じ、同海軍文書館ソボレフ館長は、1860年代のリハチョフ提督指揮下の中国艦隊史料について報告した。



報告するソコロフ歴史文書館長

また、サンクトペテルブルグ国立大学のクリモフ教授が最初の函館ロシア領事ゴシケヴィッチに関する史料群について論じ、日本側からは新潟大学の麓慎一助教授が、海軍文書館の史料を用いて日露交渉時のプチャーチン提督への訓令について分析した。

4本の報告は、幕末の1850~60年代にかけての日露関係について、それぞれの史料的視座からスポットをあて、 きわめて有意義かつ興味深いものであった。



ソボレフ海軍文書館長の報告 (左は通訳するクリモフ教授)

研究集会終了後、ロシア研究者一行は函館へ出張し、 函館市立図書館や北方歴史資料館を訪問して、ロシア関係 係史料や高田屋嘉兵衛関係史料、アイヌ関係史料を閲 覧・見学した。

史料編纂所ではロシア所在日本関係史料の調査・収集 に力を入れ、WG(委員長:保谷徹教授)を設けて史料 の目録化と複製による収集につとめている。

歴史文書館・海軍文書館の協力によって今回も数多くの史料複製を入手し、これらは史料編纂所で閲覧することができる。研究集会ではこうした調査研究事業の成果も披露された。



北方歴史資料館で高田嘉七館長の説明をうける一行 (高田館長は高田屋嘉兵衛の御子孫)

人工物工学研究センター

価値創成イニシアティブ(住友商事) 寄付研究部門設立記念講演会開催さ れる

1月18日(水)、「価値創成イニシアティブ(住友商事) 寄付研究部門」の設立記念講演会および懇親会が、本学 人工物工学研究センター(柏キャンパス)で催された。 学内外より50名を越える多数の関係者の参加を得た。

本寄付研究部門は、住友商事株式会社の寄付により昨年12月1日付で同センターに設立されたもので、人工物の価値創成をめぐる様々な問題に取り組み、新しい価値 創成の仕組みを探求することを目的としている。

記念講演会は、小宮山宏本学総長、平尾公彦本学工学系研究科長、中島尚正産業技術総合研究所理事(元センター長)、吉井伸吾住友商事代表取締役常務の挨拶により開会した。続いて、吉川弘之産業技術総合研究所理事長(元本学総長)による「人工物工学研究センターへの期待」と題した記念講演が行われ、さらに、上田完次センター長による報告と、武田英明客員教授および藤井信忠客員助教授による「本寄付研究部門のビジョン」についての講演が行われた。





挨拶をする小宮山総長(左)と吉井住友商事常務(右)



懇親会にて乾杯の音頭を取る吉川産総研理事長

引き続いて催された懇親会においても、和やかな歓談の中、産学の枠を超えた活発な交流が行われた。

詳細は本寄付研究部門のウェブページに記載されている。また、吉川弘之氏のご厚意により記念講演のものも併せて講演資料を掲載しているので、興味関心のある向きには是非とも参照されたい。

ttp://www.race.u-tokyo.ac.jp/vaci/



医学教育国際協力研究センター

アフガニスタンへの医学教育協力と カブール医科大学学長招聘

医学教育国際協力研究センターでは、2003年から国際協力機構によるアフガニスタン医学教育プロジェクトをサポートしてきた。日本からは2度の調査団の派遣、アフガニスタンからは2度の研修員受け入れを経過し、2005年7月から3年間のプロジェクトが正式実施の運びとなった。2005年11~12月にはアフガニスタンの医学部教員6名を研修員として医学教育国際協力研究センターに受け入れ、学内広報2006年1月11日号でお知らせした。このたび、2006年2月1日 (水)~14日 (火)の2週

間、当センターの大西弘高講師がカブール医科大学を国際協力機構の短期専門家として訪問した。

まず、本学医学部でも実施されているPBL(problem-based learning)テュートリアル教育に関する普及活動を行った。現実的な事例に基づき、"ology"の枠組みを取り払った形の教育は世界的にも注目されている。カブール医科大学内で大西講師がワークショップを開催し、高等教育省から早速この教育方法を進めていく旨の承諾を得た。



カブール医科大学に設置された国際協力研究センター

次いで、カブール医科大学内に設置されている教育開 発センターの機能強化を行った。

東京大学医学教育国際協力研究センターとは異なり、研究機能よりも教育管理機能を充実させるべく、カリキュラム開発部門、カリキュラム評価部門、卒後研修部門を新たに設置することで合意を得た。

最後に、本学の学術研究奨励資金による海外学術交流 拠点設置事業として、医学教育協力研究センター(カブ ール医科大学)を設置した。具体的な動きについてはこ れからである。



カブール医科大学で開催されたPBLワークショップ

また、その直後の2月25日(土)~3月4日(土)に、 文部科学省から新世紀国際教育交流プロジェクト・行政 官等受入事業により、カブール医科大学のオバイドゥ ラ・オバイド学長を招聘することとなった。



医学教育国際協力研究センターのスタッフと



小宮山総長とオバイド学長

オバイド学長は、小宮山宏本学総長、医学部長への挨拶、自身の専門である微生物学教室見学、附属病院見学と共に、文部科学省大臣官房国際課、国際協力機構、聖路加看護大学、アフガニスタン大使館等、大変精力的に日程をこなされた。オバイド学長はカルザイ大統領のアドバイザーも務める実力の持ち主で、まだ38歳になったばかりという若さには驚かされる。アフガニスタンの復興、発展に当センターが微力ながら役立てることを祈っている。

我が心の故郷 東京大学に送る感謝の辞

東京大学法学部第一類 岡本 敏男

この場をお借りして小宮山総長はじめとする皆様に 御挨拶をさせていただきたいと思います。

卒業を前にしてこの4年を振り返りますと、本当に 物心両面から支えられたのだと再認識させられます。 嬉しい時、悲しい時、いつも東京大学の両キャンパス に聳え立つ巨木に励まされたものです。そして、真に 自分の頭で考え調べることの大切さを、多彩な授業か ら学ばせていただきました。東京大学を母校にしよう と決意した、18歳の時の選択を私は誇りに思います。

私は東京生まれということもあってか、故郷の温か みをあまり知りませんでした。しかし、安田講堂や銀 杏並木を前にした時、ホッと胸をなでおろすことがで きます。23歳にして故郷を見つけることができました。 そして、家族が少ない私ではありますが、教授方々職 員の皆さんとの出会いを通じて家族ができたようにも 思えてくる今日この頃です。

「人」として成長できましたことを心から御礼申し 上げたい・・・ただ、その一心でこの拙文を書かせて いただきました。社会という荒々しい渦の中に身を投 じることに今後なろうかと思います。それゆえ、不安 の念に駆られることもしばしばございます。しかしそ んな時は、心温まる「故郷」を再び訪れてみたいと思 うのです。

人はどこに向かい、そして何故この一瞬一瞬を過ご すのか・・・永遠にわからぬことやもしれません。た だ、この4年学ぶ悦びに日々満ち満ちていたこと、頭 の中で整理がつかなかった疑問点を研究論文として完 成させることができたこと、研究室訪問などを通じて 先生方のお人柄を垣間見ることができたこと・・・こ れらのことを私は瞳を閉じた視界の果てでいつも思い 出すことができます。その意味では、充実した日々を 過ごせたことに変わりはなく、この23年で最も満ち足 りた日々でした。

本年も新入生が入ることとなり、キャンパスを歩く 方の顔ぶれも大きく変わることになるでしょう。しか し、岡本敏男という人間が長い歳月の一瞬であるにせ よ、このキャンパスで生きたことが先生方の心に僅か でも刻まれたならば、私の人生は無駄ではなかったと 思えます。時の流れに彷徨う子羊ではなく、時の流れ を自らに引き寄せることが出来たと思えます。ここに 改めて心から御礼申し上げます。

調達本部です



第5回 「政府調達」について

「政府調達」というのは、政府(国)による物品・ サービスの購入を意味します。この分野は、どこの国で も自国産業を優先しがちでしたが、世界貿易の拡大とい う観点から他国の参加を広く認めるべきだということに なりました。1980年にわが国も協定に参加し、現在は 1996年に発効した新しい協定が適用されています。そこ では一定の金額(たとえば、工事については7億3,000 万円、物品購入については1,600万円)以上の調達は国 際入札にかけることになっています。

東大は、法人化までは国の機関でしたから、当然「政 府調達」でした。ところが、法人化後も政府が出資して いる「政府関係機関」という位置づけから、あいかわら ず「政府調達」の制度が適用されています。もっとも、 単純に考えれば世界中のサプライヤーが参加する入札に よって世界一安価な契約が実現しそうなのですが...

この国際協定に基づく国際入札には細かな規則が沢山 定められています。しかも、市場の閉鎖性を欧米から批 判されてきたわが国は、「自主的措置」として独自に協 定内容以上の要件をいくつも定めたため一層厳しい内容 となっています。「教育関係政府調達事務必携」という 900ページに及ぶ分厚い参考書が売られていたほどです。

またもうひとつの難点 は、契約までに時間がか かりすぎることです。政 府調達の国際入札手続き としては、まず発注内容 を世界中に知らしめるた め、入札書受付の50日前 に官報に英文公告を掲出 する義務が課せられてい 「教育関係政府調達事務必携」 ます。公告する前には様



々の準備が必要となりますから、発注の意思決定はさら に前倒しが必要となります。

東大では毎年200件ほどの政府調達案件が発生してお り、細かな規則をなぞり長い時間をかけて国際入札が実 施されています。しかし、ここ数年間の実績を見ても海 外からの応札は2~3回しかありません。費やされる労 力と時間に見合う国際入札の効果は「無い」にひとしい ものです。

調達改善を進める視点からも政府調達制度は障害です。 国際入札物品のひとつに重油がありますが、昨年の価格 高騰以来、重油は不安定な値動きを続けています。こん な場合には短めの契約で価格変動リスクを吸収していき たいところですが、複雑な手続きからして国際入札を繰 り返して対応することは実際上不可能です。また、前回 この欄で取り上げた「文学部3号館空調設備改修工事」 がもしも政府調達案件であったなら、価格引き下げに効 果を発揮した新しい「価格交渉方式」の導入もありえな かったことになります。

最初の協定から四半世紀、海外からの入札参加が極端 に少ないことも、日本に関心のある海外企業はわが国に 支店を設けたという状況の変化があるようです。その間 に「国そのもの」から独立した法人となり、調達改善に 努力する東大にとって、日本の国際的な約束事とはいえ 「政府調達」制度の適用はマイナス面ばかりが目立つも のとなっています。

調達本部連絡先 ☎22148 櫻井

今年度最終特別号 ~平成17年度運動部成績一覧~

毎回お送りしております「Flags〜運動部紹介〜」でありますが、今回は今年度最終号ということで、平成17年度の各運動部の主な成績をまとめてみました。好成績だった部、振るわなかった部…。運動部によっても悲喜こもごもであった17年度でありましたが、18年度も引き続き「文武両道」(?)の東京大学の看板を背負って一生懸命頑張っていきますのでどうぞ応援をよろしくお願いいたします。 (東京大学運動会総務部 一同)

「ただ一つ」の王座を目指して…。 ~全国大会等成績優秀部~

| 漕艇部 | 全日本新人戦 女子シングルスカル3位 東日本新人選手権 男子シングルスカル 準優勝 男子エイト 優勝 女子シングルスカル 3位 |
|--------------------------|---|
| 馬術部 | 招待東日本学生馬術大会 準優勝 永田・磯 |
| スケート部 フィギュア 部門 | 国公立大学フリースケーティング競技会 アイスダンスAクラス 優勝 関東学生フリースケーティング選手権大会 Jr男子団体 優勝 Jr女子団体 準優勝 |
| ヨット部 クルーザー班 | J/24ミッドウィンターレガッタ 3 位 ANIORU'S CUP 優勝 (全日本学生外洋帆走連盟主催) |
| 体操部女子 | しもつき杯(16大学対抗)団体優勝 個人総合優勝 松本 |
| 少林寺拳法部 | 関東学生大会 総合優勝 |
| ボ`ディビルアンド ウェイトリフティング部 | 関東学生ボディビル選手権大会 団体優勝 佐々木 卓(2年) 優勝 ヨレス・ダヴィド(2年) 新人の部優勝 関東学生パワーリフティング選手権大会(男子) 60kg級 3位 傍鳥 75kg級 準優勝 武 100kg超級 準優勝 北川 全日本学生パワーリフティング選手権大会(男子) 60kg級 準優勝 傍鳥 100kg超級 3 位 北川 |
| フェンシング部 | 全国国公立大学大会 フルーレ女子個人3位 |
| レスリング部 | 東日本春季新人戦 60kg級 準優勝 藤山 74kg級 3位 上月 |
| 洋弓部 | 国公立大学大会 団体・個人優勝 |
| 競技ダンス部 | 国公立大学競技ダンス選手権 団体準優勝 シニアの部 3部門優勝 藤森・向田組 ジュニアの部 パソ3位 田中・八木組 |
| ラクロス部男子 | 全日本選手権大会 準優勝 |
| 相撲部 | 国公立対抗戦個人2位・新人戦優勝 ペテル |
| 躰道部 | 全国学生躰道優勝大会 準優勝・3位2名 |

「大空」にはばたけ!! ~リーグ戦1部活躍・昇格部~

| ホッケー部 | 春季関東学生ホッケーリーグ 1部昇格 |
|---------------|-------------------------|
| 洋弓部 | リーグ戦 1部6位 |
| ボーリング部 | 関東学生秋季リーグ 1部優勝 |
| ラクロス部男子 | 関東学生ラクロスリーグ 全勝優勝 |
| アメリカンフットホ゛ール部 | 関東大学アメリカンフットボールリーグ 1部昇格 |

「淡青」の旗を掲げる!! ~大学定期戦勝利部

- 全国七大学総合体育大会優勝部
- 東京地区国公立大学体育大会優勝部~

| 大学定期戦勝利 (カッコ内 対戦校) | 陸上運動部(一橋)、庭球部(京都)、 ア式蹴球部(京都)、ハンドボール部 (京都)、剣道部(防衛)、剣道部女子 (一橋)、ゴルフ部(一橋)、自転車部 旅行班(慶応) |
|-----------------------|--|
| 全国七大学総合体育 大会優勝 | 庭球部女子、ホッケー部、ヨット部ディ ンギー班470級、軟式庭球部男子、空手部 男子、弓術部男子 |
| 東京地区国公立大学 体育大会優勝 | 水泳部水球陣、卓球部、空手部男子、柔 道部、弓術部、準硬式野球部、スキー部 |

東大の「燃ゆる獅子」達 ~注目運動部・選手紹介~

| 北野 和彦 | 硬式野球部主将、茨城ゴールデンゴールズ入団 |
|----------------|---|
| ヨット部 クルーザー班 | 世界選手権大会出場、17年度第1回総長賞受賞 |
| 少林寺拳法部 | 国際大会 準優勝 岡野・倉林 |
| ペテル・ マテュウシュ | 相撲部主将、世界選手権出場、NHK・民放出演、 17年度第2回総長賞受賞 |
| 明石 顕 | 陸上運動部0B、世界陸上競歩出場 |

連絡先:東京大学運動会(学生部学生課体育チーム) TEL: 03-5841-2511 HP: http://www.undou-kai.com/

^{コラム} 「バリアフリーの東京大学」の実現に向けて

第3回 東大で働く - 障害をもった教職員として-

本学のバリアフリーに関するコラムの第3回目です。今回は、視覚障害者である田中仁さんと、盲ろう者である福島智さんのお二人にお願いしました。今回でひとまず、バリアフリーに関する連続した記事の掲載は終えますが、今後も引き続き、学内広報では本学でのバリアフリーの推進に関する取り組みを紹介してまいります。

視覚障害教職員として東大で働く

数理科学研究科 COE特任研究員 田中 仁

私は、幸運にも機会をいただき、平成15年9月より数理科学研究科においてCOEの特任研究員として数学の研究と教育とに従事している。数学は、自然科学の中で、比較的視覚障害者に向いた分野であるとされている。確かに、その研究に不可欠の「自然との対話」は、数学の場合多くは「数式との対話」もしくは「数学的イメージとの対話」であり、それらはたいてい紙の上もしくは頭の中だけで成立する。欧米では、多くの視覚障害を持つ数学者が活躍しており、"The World of Blind Mathematicians"(A. Jackson, Notices of the American Mathematical Society, 49, 2002)という特集記事が書かれるほどだ。私は、その世界を作り出すほどの能力はなさそうだが、頭の中で数式との対話(trial and error)を日々繰り返しつつ、好きな数学

いかに向いているとはいえ、視覚障害者が研究と教育を行うのはなかなかに不便だ。私が現在バリアフリー支援室から受けている支援は、必要なソフトウェアがインストールされたコンピュータと点字プリンタとの貸出、そして、週に1度5時間の支援者の派遣である。この支援者の派遣は、数理科学研究科の理解も得て実現した。資料の音読、私の作った文章の最終チェック、論文・資料の収集等、今では支援者の派遣は私にとって不可欠のものとなっている。

東大が全学的な観点からバリアフリーを促進しようとしていることは、障害者として支援を受けて働いているものとして、直面する個々の問題を全体の中で捉えなおし解決し得るという点で非常に心強い。支援室があり、そこに専門性をもったコーディネーターが常駐している。これも、それだけで、非常に心強いことである。残念ながら、現在は障害者が自己努力だけで夢を実現できる社



の研究を続けている。

会がと学り学が夢れとないのとるながと学り学があるとるがいのとるが等にといて持社の大者にな大がらこ。

バリアフリーの東大は日本を変える

先端科学技術研究センター バリアフリー分野助教授 福島 智



た体制は日本はもとより、世界的にも例がないと言われる。関係者の勇断に感謝したい。

ただ、残念なのは、全盲や全ろうなどの単一の重度障害のある状態で常勤教員に新規採用された人も、本学ではこれまでほとんどなかったか、皆無だったらしいということだ。いったいなぜだろう。少なくともその重要な原因の一つに、障害のある教員を支援する仕組みが本学になかった、ということがあげられるかもしれない。その意味で、バリアフリー支援室が、障害のある学生に加えて、教職員をも支援の対象にしたことは、たいへん意義深い。

ところで、私が2001年に着任して最初に研究室をもらったのは、駒場 Π キャンパスにある先端研の13号館の 1 階だ。この建物は1929年竣工で、旧東京帝国大学航空研究所本館だったという。ちなみに、私の支援スタッフには女性が多い。彼女らはトイレに行くのに2 階に上がっている、ということに気づいた時、私は尋ねた。

「どうして、わざわざ2階に行くの?」 「1階には 男子トイレしかないからです」。そうだったのか。私の胸が痛んだ。

つまり、各階にトイレが一つずつしかない、ということは、東京帝大は「男」の存在しか想定していなかったと言うことである。それだけではない、そもそも戦前は女性に参政権さえなかったではないか・・・。

バリアフリーの理念は障害者だけに関わるものではない。この社会には昔も、そして今も、有形・無形の多くの「バリア」が構造的に存在する。東大を「バリアフリー化」することは、日本社会からこうしたさまざまな「バリア」をなくすことに繋がるのだと思う。

<東京大学バリアフリー支援室 連絡先> TEL:03-5452-5067 FAX:03-5452-5068 E-mail:spds-staff@mm.itc.u-tokyo.ac.jp



56歳で大学院入学、76歳で論文博士!

教育学研究科では、昨年9月に清川郁子氏(77)へ の学位授与が決定され、この3月1日(水)の教授会 席上で、佐藤学研究科長から学位記が清川氏に手渡さ れた。

清川氏は、1929年1月生まれ。1985年に56歳の時に 研究の道を志し、慶應義塾大学大学院社会学研究科に 入学、修士課程・博士課程を修了した後、本学大学院 教育学研究科の研究生としてさらに研究を続けられ た。その後、中央大学や放送大学で非常勤講師等をさ れるかたわら、博士論文の執筆に精力を傾け、昨年4 月に博士論文を提出されていた。

教育学研究科での学位授与最高齢記録をこれまでの 65歳から大幅に塗り替えただけでなく、今回のように きわめて晩学の方に学位が授与される例は、これまで ほとんどなかった。

博士論文の題目は、「近代日本におけるマス・エデ ュケーションの成立と社会構造―比較社会論的視点か らの考察―」で、400字詰め原稿用紙換算で1500枚を 超える重厚な研究。米国の研究から理論的アイデアを 借りつつ、明治・大正期の全国統計や、農村・都市の いくつかの地域を選んで、社会・経済構造の変化と義 務教育就学実態の変化との関連を考察したものであ

論文では、リテラシー (識字) の上昇パターンの地 域間の違いを統計的に考察して、その背景が考察され ているとともに、明治・大正期の地方名望家層が、い かに地域の公教育の普及・充実に熱心に取り組んだの かが、綿密な史料調査に基づいて浮き彫りになってい る。

佐藤学・教育学研究科長の談話

「リテラシーと公教育制度の普及との関係を、『壮 丁教育調査』を資料に使って統計的に分析された論文 を発表されたのが1990年代でしたが、その頃から清川 さんのご研究には注目していました。博士論文は、き ちんとした理論枠組みと緻密な実証研究が組み合わさ れた、すぐれた論文です。何よりも、あの年齢で研究 を始められてこの水準まで到達されたことがすばらし

藤田英典・国際基督教大学教授(東京大学名誉教授) の談話

「清川さんが東大の研究生時代に、私が2年間指導 しました。理論的な枠組みを立てる過程につき合いま したが、実に勉強家でした。難解な英語文献を読みこ なし、自分の研究に活かしていく様子は、年齢を感じ させない鋭さを感じさせられました。|

清川氏本人の談

「私の研究の出発点にありましたのは、1980年に半 年間、インドに滞在し、『不可触民』とイリテラシー の問題に、強い衝撃を受けたことにあります。しかし、 この研究を本当に完成に導いてくれたものは、研究生 としてお世話になった東京大学教育学研究科の、水準 の高さと、学問研究の開放性とであったと思います。|

淡々とした調子の話しぶりの裏側に、手がけた課題 への深い問題意識、学問研究への真摯で熱い思いと、 論文を書き上げるまでに出会ったさまざまな人への細 やかな気配りが感じられた。今は少し体調を崩されて いるが、調子は上向きだそうだ。

博士論文は、若干の加筆をして、世織書房から近々 出版される予定だそうである。



左から、佐藤学研究科長、清川郁子氏、金子元久評議員。

(大学院教育学研究科教授 広田照幸)

38

コミュニケーションセンターだより No.15

■コミュニケーションセンターがネット上にオープン! http://www.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp

コミュニケーションセンター開設以来、多くの皆様に ご利用いただいていますが、やはり赤門横の店舗だけで は本郷以外のみなさまにはご不便をおかけしていたこと と思います。そこでいよいよコミュニケーションセン ターをネット上にオープンすることとなりました。これ まで店舗にお越しいただけなかったみなさまにも、これ からはネットからご注文をいただけるようになります。 是非、ご利用ください。

新しいコミュニケーションセンターのトップ画面



こちらのコーナーか ら各商品の紹介ペー ジへ。

商品カテゴリーは

- · 東大開発商品
- 革製小物
- 食器
- ・ファッション
- ・ステーショナリー
- 書籍

の6つ

各カテゴリーのT OP画面では、その カテゴリーの商品一 覧が表示されます。

カテゴリーTOP画面



商品詳細画面



当面、お支払い方法は、代金引換・振込・書留のみとなっていますが、順次、カード決済にも対応していく予定です。尚、本学の経費での購入については、ネットから校費購入申込書をダウンロードしていただき、ご利用ください。

(担当: 渉外本部 曾我)



東京大学コミュニケーションセンター The University of Tokyo Communication Center

The University of Tokyo

OPEN: 月曜~土曜 10:30~18:30

電話:03-5841-1039

http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/utcc01_j.html

INFORMATION -

シンポジウム・講演会

シンポジウム・講演会

AGS推進室

21世紀の地球環境を考えるサマーワークショップYES2006のお知らせ

マサチューセッツ工科大学、スイス連邦工科大学、チャルマース工科大学、本学の間で、地球環境を維持しつつ人間活動の持続的発展をめざし国際協力を進めている AGS(Alliance for Global Sustainability)の環境教育部会では、下記の通り、サマーワークショップ Y.E.S.(Youth Encounter on Sustainability)を、スイス・ブラウンバルトの山荘にて開催します。

Energy、Technology、 Food and Water、Social Issuesの4つの観点から、話題提供、見学、討論、発表という手順で、持続性についての各自の考え方を深め、共同提案書づくりを目指します。

YESは2000年から昨年まで11回開催されていますが、2005年夏のセッションでは、28か国から38名の学生と15名ほどの講師陣とで、ほぼ貸し切り状態の山荘で熱いディスカッションを繰り広げました。また環境に配慮した工場、直接民主主義制度の自治体、バイオ農場などの見学も行いました。

参加資格は、学部生(原則として4年生)および大学 院生で、下記の各セッションとも上記4大学から約5名 ずつと4か国以外の各国から約20名の計40名を予定して います。

本ワークショップの趣旨に賛同し、応募ご希望の方は、 申込書に400語以内の英文エッセイを添えて、下記まで お申し込み下さい。応募者多数の場合は、面接等による 審査により決定させていただきます。

なお参加者は一人あたり1500USドル(航空運賃、滞 在費、宿泊費を含む)の自己負担が必要です。本学学生 諸君の多数のご応募をお待ちしています。

本件については、8月上旬にタイにて開催の「IPoS 2006」と同時に募集・選考を行います。両方への応募は可能ですが、参加可能なのは片方のみです。「YES2006」および「IPoS2006」の詳細については、下記ホームページも参照して下さい。

日程:7月セッション 2006年7月8日(土)~24日(月) 8月セッション 2006年8月12日(土)~28日(月) (この前後に、移動日が必要です。)

場所:スイス連邦、ブラウンバルト

申込締切: 2006年4月28日(金)

(ただし、東京大学以外での募集は3月31日

に締めきっています。)

詳細説明および申込書式:

YES 2006 (本部)

 $http://www.sustainability.ethz.ch/en/activities/documents/YES_Flyer2006_wInlay_RevB_000.pdf$

IPoS 2006およびYES 2006

http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/aee-labo/YES-IPoS

問い合わせ先:AGS教育部会 山路永司教授 yamaji@k.u-tokyo.ac.jp

シンポジウム・講演会

大学院総合文化研究科・教養学部

教養学部進学情報センター主催シンポジウム 「私はどのようにして専門分野を決めたか」

開催日時:平成18年4月28日(金) 16:30~20:00

会場:教養学部18号館1階ホール

各学部の先生を講師にお招きし、先生方がどのように して現在の専門分野を決められたか、その選択にどのよ うな自分の夢を託されたか、その夢を実現するためにど のように努力されたかなど自由にお話しいただきます。 また、現在の専門分野の面白さや将来像などについても お話ししていただきます。

このシンポジウムが、学生諸君にとって、「大学で学ぶことの意味」を問い直し、より広い視野のなかで進学を考える機会となってくれることを願っています。先生方との質疑応答の時間も予定していますので、ぜひ、参加してください。講師の先生方の所属、氏名(専門分野)、演題は以下の通りです。

法学部 藤原 帰一 教授(政治学) 「政治嫌い」

工学部 丸山 茂夫 教授 (機械工学) 「機械からナノテクへ」

文学部 鈴木 淳 助教授(日本史) 「日本史への道、日本史からの道|

理学部 山内 薫 教授(量子化学) 「分子は光輝く|

農学部 吉田 薫 助教授(植物育種学) 「遺伝子から応用研究へ|

経済学部 松井 彰彦 教授(経済理論) 「不健全な利他心、健全な利己心」

教育学部 今井 康雄 助教授(教育学) 「教職をあきらめて」

薬学部 長野 哲雄 教授(薬品代謝化学) 「学問と人との出会い」

医学部 名川 弘一 教授(腫瘍外科学) 「未知-不安と探求-|

※シンポジウムの最後に進学情報センターより 進学振分けの説明会を行います。

問い合わせ先:教養学部進学情報センター 単見大作教授(内線 46187)



お知らせ

学生部

平成18年度運動会主催行事のお知らせ

平成18年度も東京大学運動会は、皆様に様々なスポーツの機会をご提供します。奮ってご参加下さい。なお、開催月はあくまでも目安であり、詳しい場所・日時等は随時、学内広報や、学内掲示板、運動会ホームページなどで告知していきます。どうぞお楽しみに。

| 開催月 | 行事名 | 場所 | |
|-----|-------------|------------|--|
| 5月 | 水泳講習会 | 本郷二食地下プール | |
| | ゴルフ講習会 | 検見川総合運動場 | |
| | ボウリング講習会① | 池袋・ハタボウリング | |
| | かり リマノ 瞬日云① | センター | |
| 6月 | ダンス講習会① | 駒場剣道場 | |
| | 馬術講習会① | 三鷹馬場 | |
| | 御殿下記念館バレー | 御殿下記念館 | |
| | ボール大会 | 呼然「心心括 | |

| 9月 | 総長杯野球大会 | 本郷硬式野球場・駒場 野球場 | | |
|------|------------------|---------------------|--|--|
| 10月 | 伊豆・戸田マラソン 大会 | スポーティア戸田 | | |
| | 水上運動会 (ボート競技) | 荒川 (戸田公園) | | |
| | 馬術講習会② | 三鷹馬場 | | |
| 11月 | ダンス講習会② | 駒場剣道場 | | |
| | バスケットボール 大会 | 駒場体育館 | | |
| | グライダー試乗会 | 埼玉県大里郡妻沼滑空場 | | |
| 12月 | スケート講習会 | 高田馬場シチズンスケー トリンク | | |
| 1月 | ボウリング講習会② | 池袋・ハタボウリング センター | | |
| 通年 | クライミング講習会 | 御殿下記念館 | | |
| 10月~ | 総長杯サッカー大会 | 御殿下グラウンド | | |
| 1月 | 主将合宿 | 検見川総合運動場 | | |
| 未定 | レスリング講習会 | 未定 | | |
| 未定 | 空手講習会 | 未定 | | |
| 未定 | バドミントン大会 | 未定 | | |
| 未定 | 合気道講習会 | 未定 | | |
| 未定 | アーチェリー講習会 | 未定 | | |

連絡先:東京大学運動会 (御殿下記念館モール階) Tel (03)5841-2511

運動会ホームページ http://www.undou-kai.com/

お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

第107回オルガン演奏会の開催

教養学部では恒例のオルガン演奏会を次のとおり開催 します。

このたびは、フランスの世界的なオルガニストである クレール氏をお迎えし、ヨーロッパ各国のバロック期から20世紀までに至るオルガン曲をお楽しみいただきま す。どうぞご期待ください。

入場は無料です。ホームページを開設していますので、 ぜひご覧ください。http://organ.c.u-tokyo.ac.jp

■日時 4月27日 (木) 18時30分開演 (18時開場)

■場所 教養学部900番教室(講堂)

■曲目

J-Ph・ラモー オペラ「優雅なインドの国々」より序曲 $(M \cdot クレール編曲)$

B・マルチェッロ オーボエと弦楽器のための協奏 曲ハ短調よりアダージョ (L・チェレギン編曲)

D・ブクステフーデ 前奏曲 とフーガとシャコンヌ ハ長調 (BuxWV 137) C・バルバストル ノエル「陽気な羊飼いはどこへ」
 J・S・バッハ 前奏曲とフーガ ロ短調(BWV 544) カンタータ 147番より コラール「目覚めよ、わが心」(M・デュリュフレ編曲)

 $G \cdot \ddot{\sigma}$ ェルディ オペラ『ドン・カルロ』より グラン・フィナーレ「ここに喜びの日が現れる」($M \cdot$ クレール編曲)

G・リテーズ 「24の典礼前奏曲」より 19番イ長調、23番ロ長調

P・コシュロー 「晩課の楽節による13の即興曲」 (J・ジュラン採譜) より フルート管,トレモロ,ミューテイション,基本管,キャンタード

J・ラングレ 「3つのグレゴリオ聖歌のパラフレーズ」より テ・デウム

■演奏 モーリス・クレール

お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

スポーツ・トレーニング(実習)開講 のお知らせ

教養学部では専門課程の学生を対象としたスポーツ・トレーニング(実習)を開講します。学部、学科を問わず専門課程および大学院の学生であればどなたでも他学部聴講として履修できます。ただし卒業に必要な単位の一部として認定している学部は現在、法学部(2単位まで)、経済学部(2単位まで)、教養学部(超域文化科学科のみ1単位)、教育学部(2単位まで)、文学部(1単位)です。その他の学部・研究科では随意科目となります。

科目名:スポーツ・トレーニング

開講学部:教養学部

単位:1週1回90分1学期の授業で1単位を与える。

開講曜限・場所:木曜3限(13:15~14:45) および4限(15:15~16:45) に本郷御殿下記念館および御殿下グラウンドで行う。金曜5限(16:20~17:50) に駒場テニスコートで行う。

科目番号:905 (木曜 3 限)、906 (木曜 4 限)、907 (金曜 5 限)

本郷キャンパスでの開講種目と定員:

3 限(13:15~14:45)

ソフトボール40名バレーボール40名卓球20名バドミントン20名

4 限(15:15~16:45)

トレーニング***** 40名 バスケットボール 40名

*マシンの使用を中心とした筋力トレーニング。受講によって御殿下記念館トレーニングルーム使用資格が

与えられます。

駒場キャンパスでの開講種目と定員:

金曜 5 限 (16:20~17:50)

テニス

20名

ガイダンスおよび受講登録:本郷キャンパスでの開講種目については4月13日(木)上記のそれぞれの授業時間に法学部31番教室で行います。テニス(駒場)については4月14日(金)5限に教養学部身体運動科学研究棟会議室で行います。同一学期に2コマ以上履修することはできません。

問い合わせ先:教養学部生命環境科学系

八田助教授(内線46862)

e-mail: hatta@idaten.c.u-tokyo.ac.jp

お知らせ

アイソトープ総合センター

平成18年度新規放射線取扱者全学一括講習会 開催と放射線取扱者再教育用資料の配付

東京大学において、アイソトープや放射線発生装置 (X線発生装置 (100万電子ボルト未満) 等を含む)、電子顕微鏡 (加速電圧100kV以上) 等を使用する人 (放射線取扱者) は、全員、所属部局で登録し、放射線安全取扱・法令等の教育・訓練を受講し、特別健康診断を受診することが必要です。特に、新たに放射線取扱者になろうとする人は、予め所属部局に登録申請し、全学一括で開催される新規放射線取扱者講習会を受講することが義務づけられています。

全学一括の新規放射線取扱者講習会には研究等に放射線を利用する人を対象とする「RIコース」と「X線コース」、放射線診療従事者を対象とする「診療放射線コース」と「核医学コース」があります。放射線取扱の内容により受講が必要なコースが異なります。

平成18年度の全学一括新規放射線取扱者講習会の開催 予定は以下のとおりです。

平成18年度新規放射線取扱者講習会開催日程

◎RIコース日程・定員(1日目・講義、2日目・実習)

| 第126回 | (A) | 5月8日 | (月)、 | 9日 | (火) | 60名 |
|-------|-----|--------|------|-----|-----|-----|
| 第126回 | (B) | 5月8日 | (月)、 | 10日 | (水) | 60名 |
| 第127回 | (A) | 5月24日 | (水)、 | 25日 | (木) | 60名 |
| 第127回 | (B) | 5月24日 | (水)、 | 26日 | (金) | 60名 |
| 第128回 | (A) | 6月13日 | (火)、 | 14日 | (水) | 60名 |
| 第128回 | (B) | 6月13日 | (火)、 | 15日 | (木) | 60名 |
| 第129回 | (A) | 7月26日 | (水)、 | 27日 | (木) | 60名 |
| 第129回 | (B) | 7月26日 | (水)、 | 28日 | (金) | 60名 |
| 第130回 | | 10月10日 | (火)、 | 11日 | (水) | 60名 |
| 第131回 | (A) | 12月4日 | (月)、 | 6 日 | (水) | 60名 |
| 第131回 | (B) | 12月4日 | (月)、 | 7日 | (木) | 60名 |

◎英語RIコース日程・定員(1日目・講義、2日目・実習)第16回 12月5日(火)、6日(水) 30名

◎X線コース日程・定員 (講義のみ)

| 第94回 | | 5月11日 | (木) | 100名 |
|------|-----|--------|-----|------|
| 第95回 | (柏) | 5月12日 | (金) | 100名 |
| 第96回 | | 5月23日 | (火) | 100名 |
| 第97回 | | 6月28日 | (水) | 100名 |
| 第98回 | | 7月24日 | (月) | 100名 |
| 第99回 | | 12月12日 | (火) | 100名 |

◎英語X線コース日程・定員(講義のみ)

第13回 12月12日 (火) 30名 (以上の各コースは、第95回X線コース以外はアイソト ープ総合センターの教育訓練棟で実施します。)

各回の定員を上回る申込みのある場合には、受講する回を変更して頂く場合もあります。また、日本語が理解できない留学生や外国人研究者のために、英語によるRIコースとX線コースを12月に開催します。新たに外国人受入れ予定のある関連研究室では、ご承知おき下さい。

5月開催のRIコースおよびX線コースの受講希望者は、できるだけ早く、所属部局の事務室または放射線管理室へお申し込み下さい(締切り日は部局により異なりますので、確認して下さい)。

まず部局での申込・登録が必要です。アイソトープ総合センターで直接申込みを受け付けることはできません。なお、第130回、第131回RIコース、第16回英語RIコース、第99回X線コース、第13回英語X線コースについては、9月初旬、受講対象者に改めて案内をお送りします。その際にお申し込み下さい。

このほかに、全学一括新規放射線取扱者講習会の診療 放射線コースと核医学コースも開催する予定です。詳細 が決まり次第、病院部局の担当係に連絡いたします。

一方、以前より放射線取扱者である人は、毎年、それぞれの部局で再教育を受けることが法令により定められています。実施内容や方法については、それぞれ所属の研究室や部局の担当者に確認して下さい。

アイソトープ総合センターでは、東京大学における放射線取扱者(約 6,000名)の再教育における参考資料として、毎年、年度始めに8~12ページの小冊子「放射線取扱者再教育用資料」を登録されている取扱者全員に配布しています。平成18年度に配付する「放射線取扱者再教育用資料 No.24(2006)」の内容は、「「SPring-8」について」、「高エネルギー加速器施設利用者が留意すべき点」、「33P:ポストゲノムの有効なツールとしての可能性と使用上の注意点」、「放射線障害防止法が改正されました」です。資料が配付されましたら目を通して頂き、今後の研究および放射線管理の参考にして下さい。

平成18年度新規放射線取扱者講習会の開催日程と募集 についてはホームページでも案内しています。

http://www.ric.u-tokyo.ac.jp/

お知らせ

空間情報科学研究センター

GISサイトライセンスサービス、最新プロダクトをリリース!

空間情報科学研究センターは、平成18年3月1日より、GISサイトライセンスサービスにおいて最新プロダクト(ArcGIS9.1)をリリースしました。

GISサイトライセンスサービスとは、地理情報システムアプリケーション(ArcGIS)のライセンスを学内で 無償提供する研究支援サービスです。

本サービスは平成17年春の提供開始以降、好評を博しており、利用申請数はすでに500ライセンスを上回っています。今回リリースしたArcGIS9.1では、従来おこなえかったルート解析、最寄り施設の検出などのネットワーク空間解析機能が追加され、より高度な空間解析を実現しています。

ArcGIS9.1の概要は以下の通りです。

【ネットワークアナリストの追加】

マルチモーダルネットワークの対応に加え、ルート解析、ディレクション (道案内)、最寄り施設の検出、サービスエリア (商圏) 解析などネットワーク状の空間データ解析機能が可能となりました。

【数値地図データ変換ツールが標準搭載】

ArcGIS Desktop製品 (ArcView、ArcEdit、ArcInfo) に数値地図データ変換ツールが標準搭載されました。

詳細はGISサイトライセンスサービスサイトをご参照ください。



GISサイトライセンスサービスのトップページ http://sls.csis.u-tokyo.ac.jp

お知らせ

空間情報科学研究センター

バーチャルキャンパスサービスを開始!

空間情報科学研究センターは、平成18年2月20日より バーチャルキャンパスサービスを開始しました。

バーチャルキャンパスとは米国ESRI社製の地理情報システムアプリケーション:ArcGISの使い方を、インターネット上で学ぶことができるeラーニング教材サイトです。無料のものから有料のものまで多くのコースやワークショップが開講されています。

本学ではArcGISサイトライセンスサービスによって、 ESRI社から提供されたコースに限り本学に所属する構成員は無料で受講することができます。

今回開始したバーチャルキャンパスサービスの概要は 以下の通りです。

【特徴】

- ・地理情報システムの基礎からArcGISの使い方までを インターネット上で学習可能。
- ・本学内で開講される講義で、教材として利用可能。
- ・米国ESRI社が提供しているコースはすべて無料。
- ・すべてのコースは英語で提供。
- ・試験合格後に修了証の発行。
- ・受講できるコースは約60種類(平成18年3月現在)。

【受講資格】

本学に所属する教職員、研究員、学生であり、かつu-tokyo.ac.jpドメインを持つメールアドレスを利用している者。

詳細は、バーチャルキャンパスサービス (http://vc.csis.u-tokyo.ac.jp/)、ArcGISサイトライセンスサービス (http://sls.csis.u-tokyo.ac.jp/) をご参照ください。



バーチャルキャンパスサービスのトップページ http://vc.csis.u-tokyo.ac.jp/

お知らせ

附属図書館

平成18年度総合図書館 オリエンテーション開催

初めての方はもちろん、これまで利用したことのある方も、この機会に資料の宝庫と呼ばれる総合図書館を使いこなせるよう、ぜひご参加ください。内容は、以下の通りです。

●利用案内(総合図書館の利用案内)、書庫案内(書庫の案内・利用法)、OPAC入門(GACoSの紹介とOPACの使い方)、 国際資料室案内(国際資料室の資料とインターネットによる検索)

※予約不要。総合案内カウンター(1階)集合。今回は英語によるコース(利用案内・OPAC入門)も用意しました。 準備の都合上、英語コースのみなるべく事前に総合図書館参考調査係(sanko@lib.u-tokyo.ac.jp)へお申込ください。

スケジュール

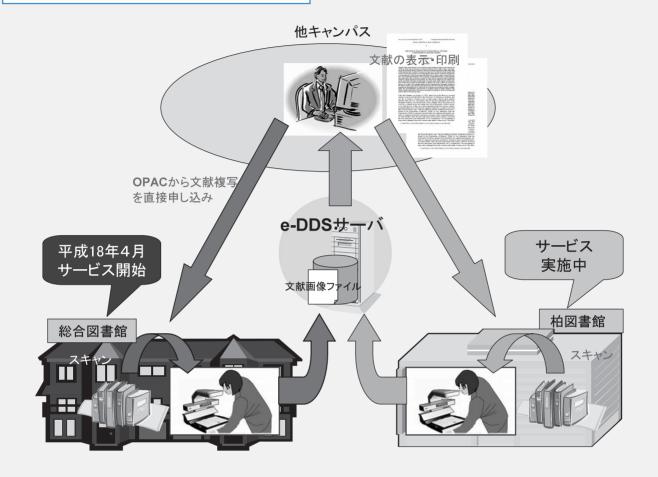
| 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|-------------------------|-------------------------|-------------|-------------------------|-------------------------|
| 4/3 | 4/4 | 4/5 | 4/6 | 4/7 |
| | | | 利用案内(2回) | 利用案内 |
| | | | 9:30-10:00/15:30-16:00 | 10:30-11:00 |
| | | | 書庫案内(2回) | 書庫案内 |
| | | | 10:00-10:30/16:00-16:30 | 11:00-11:30 |
| | | | OPAC入門(2回) | OPAC入門 |
| | | | 10:30-11:00/16:30-17:00 | 11:30-12:00 |
| 4/10 | 4/11 | 4/12 | 4/13 | 4/14 |
| 利用案内 | 英語(利用案内・OPAC) | 利用案内 | 利用案内 | 英語(利用案内・OPAC) |
| 13:30-14:00 | 14:00-15:00 | 9:30-10:00 | 10:30-11:00 | 13:00-14:00 |
| 書庫案内 | 利用案内 | 書庫案内 | 書庫案内 | |
| 14:00-14:30 | 15:30-16:00 | 10:00-10:30 | 11:00-11:30 | |
| OPAC入門 | 書庫案内 | OPAC入門 | OPAC入門 | |
| 14:30-15:00 | 16:00-16:30 | 10:30-11:00 | 11:30-12:00 | |
| | OPAC入門 | | | |
| | 16:30-17:00 | | | |
| 4/17 | 4/18 | 4/19 | 4/20 | 4/21 |
| 利用案内(2回) | 利用案内(2回) | 利用案内 | 国際資料室案内(2回) | 国際資料室案内(2回) |
| 10:30-11:00/15:30-16:00 | 9:30-10:00/13:30-14:00 | 10:30-11:00 | 10:30-11:00/15:30-16:00 | 10:30-11:00/15:30-16:00 |
| 書庫案内(2回) | 書庫案内(2回) | 書庫案内 | | |
| 11:00-11:30/16:00-16:30 | 10:00-10:30/14:00-14:30 | 11:00-11:30 | | |
| OPAC入門(2回) | OPAC入門(2回) | OPAC入門 | | |
| 11:30-12:00/16:30-17:00 | 10:30-11:00/14:30-15:00 | 11:30-12:00 | | |
| 4/24 | 4/25 | 4/26 | 4/27 | 4/28 |
| 国際資料室案内(2回) | | (休館日) | | |
| 10:30-11:00/15:30-16:00 | | | | |

お知らせ

附属図書館

総合図書館でe-DDSサービス開始

4月から、総合図書館でe-DDSサービスを開始します。 駒場キャンパス、柏キャンパスなどから総合図書館所蔵 の雑誌論文を取り寄せる時間が、大幅に短縮されること になります。



e-DDSとは、文献複写の申込みから閲覧までをWeb上 で行うサービスです。読みたい文献をお手元のパソコン までお届けします。文献の申込・受取のために図書館 (室) まで出向くことなく、その上迅速に文献を受け取 ることができる便利なサービスです。柏図書館では、昨 年3月にサービスを開始し、月に約150件の利用があり ます。柏図書館は本学の自然科学系学術雑誌バックナン バーセンターとして、学術雑誌1万タイトル、約20万冊 を自動化書庫に所蔵しています。これらの雑誌に収録さ れている文献を、申込に応じてスキャナで電子ファイル にし、学内ネットワークを通じて提供しています。総合 図書館には、2.6万タイトル、約35万冊の学術雑誌が所 蔵されています。東大OPACで検索して総合図書館の所 蔵に[e-DDS]ボタンが表示されていればe-DDSサービス の対象資料です。e-DDSサービスの利用にあたっては、 事前に図書館Webリクエストサービスの登録が必要で す。最寄りの図書館室にお尋ねください。

また、e-DDSサービスについて詳しいことは、附属図書館ホームページのe-DDS利用案内をご覧ください。



自動化書庫出納ステーションとスキャナ (柏図書館)

e-DDS利用案内

http://ds.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/edds/e-DDS_menu.html OPAC

http://opac.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/

EVENT LIST

| 行事名 | 日時 | 場所 | 連絡先・HP等 |
|---|---|--|--|
| ノーベル化学賞受賞者 ポール・バーグ博士特別講演 "Science and Society: A Tense Relationship" | 4月13日(木) 17:30~ | 小柴ホール (本郷キャンパス理学部1号館) | 研究協力部国際課 TEL:03-5841-2090 FAX:03-5689-7344 e-mail:cs@adm.u-tokyo.ac.jp |
| 医学部特別講義 「Moments of Discovery」 by Dr. Paul Berg | 4月14日(金) 15:00~ | 医学部教育研究棟14階 鉄門記念講堂 | 医学部教務係 03-5841-3321 http://sun.bio.m.u-tokyo.ac.jp/ |
| 「東京大学の生命科学」シンポジウム ※1329号参照 | 4月15日(土) 10:00~ | 安田講堂 | 分子細胞生物学研究所 伊藤 TEL: 03-5841-7800 FAX: 03-5841-1458 E-mail: ito.m@ iam.u-tokyo.ac.jp http://www.iam.u-tokyo.ac.jp/ut_bio.html |
| 医科学研究所一パスツール研究所 合同国際シンポジウム [100年におよぶ感染症の恐怖との戦い] ※1331号参照 | 4月18日(火) 9:30~ | 医科学研究所1号館講堂 | 医科学研究所 学術連携推進室 E-mail: LOCUS@ims.u-tokyo.ac.jp http://www.ims.u- tokyo.ac.jp/imswww/Event/symposium060418-j.htm |
| 先端医療開発研究クラスター(第2回) ナノバイオ・インテグレーション研究拠点 合同シンポジウム | 4月21日(金) 13:00~ | 工学部新二号館 | 医学部附属病院 先端医療開発研究クラスターシンポジウム事務局 TEL: 03-5800-9188 FAX: 03-5800-9193 E-MAIL:pr@adm.h.utokyo.ac.jp |
| 国際ワークショップ 文科省特定領域:東アジアの海域交流と日本伝統文化 の形成「中近世東アジア貨幣史の特殊性・共時性とそ の貨幣論的含意」 | 4月24日(月) 9:15~ | 山上会館001号室 | 東洋文化研究所 黒田明伸 kuroda@ioc.u-tokyo.ac.jp http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/ |
| 国際ワークショップ トヨタ財団研究助成:世界史にみる貨幣流通の非均質 性、補完性についての研究―自律的で競存的な貨幣シ ステムの可能性を探る | 4月25日(火) 9:30~ | 山上会館001号室 | 東洋文化研究所 黒田明伸 kuroda@ioc.u-tokyo.ac.jp http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/ |
| 行事名 | 開催期間 | 場所 | 連絡先・HP等 |
| 「重井陸夫博士コレクション ウニの分類学」展 | 10月15日 (土) ~ 4月16日 (日) | 総合研究博物館本館 | 総合研究博物館ハローダイヤル 03-5777-8600 http://www.um.u-tokyo.ac.jp |
| 特別展示 『アフリカの骨、縄文の骨―遥かラミダスを臨む』展 ※1326号参照 | 11月26日 (土) ~ 4月16日 (日) | 総合研究博物館本館 | 総合研究博物館ハローダイヤル 03-5777-8600 http://www.um.u-tokyo.ac.jp |
| 第104回(平成18年春季)東京大学公開講座 「人口」 ※1331号参照 | 4月1日(土) 8日(土)、 22日(土)、5月13日 (土)、20日(土) | 大講堂(安田講堂) | (財) 東京大学綜合研究会 担当:德久 TEL:03-3815-8345 FAX:03-3816-3913 http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/d04_01_01_j.html |
| 第33回生研イブニングセミナー 「情報エレクトロニクスの基礎と応用」 | 4月14日(金)~6月30 日(金)18:00~(5月5日、 5月26日、6月2日を除 く各金曜日) | 生産技術研究所 (駒場リサーチキャンパス) 総合研究実験棟(An棟) | 生産技術研究所 総務課広報企画係 TEL 03(5452)6017~8 FAX 03(5452)6073 http://www.iis.u-tokyo.ac.jp/announce/ |



ご意見・ご感想投稿大募集!

UTカフェは読者コメントを掲載するコーナーです。「学内広報」に掲載された記事に関するご意見・ご感想をはじめ、学内の様々な事柄に関して常々思っていることなどを、気軽にお寄せください。

投稿はEメールで受け付けます。メールの本文に以下の項目を記入し、下記アドレスまでお送りください。メールの件名は「意見」としてください。誌面への掲載はペンネーム・匿名が可能ですが、連絡用として投稿の際には氏名・所属をご記入ください。

<投稿先メールアドレス>

kouhou-ex@adm. u-tokyo. ac. jp

<記入項目>

- ①氏名·所属 ②連絡先電話番号
- ③本名・匿名・ペンネームの希望
- ④タイトル (20字以内) ⑤本文 (300字以内)

「東大川柳」も同時募集

「UTカフェ」では、東京大学をテーマにした「東大川柳」も同時募集します。優秀作は不定期で「UTカフェ」に掲載します。川柳の投稿の際には、メールの件名を「川柳」とし、④に川柳をご記入ください(⑤はなし)。

Contents

特別記事

02 進んでいます、施設整備

NEWS

一般ニュース

- **04** 平成18年度 学科・専攻等の設置等 について
- (1) 第2次学力試験(前期日程)の合格者、同(後期日程)第1段階選抜結果の発表
- 10 東京大学基金による平成18年度国際交流 助成事業の採択決まる
- 10 「東京大学稷門賞」授賞式を挙行
- 11 東京大学石綿対策ガイドライン制定

部局ニュース

- 12 退職教員の紹介
- 29 駒場 I キャンパスで研究科長と留学生の 懇談会開催される
- 29 附属中等教育学校で卒業式が行われる
- 29 留学生見学旅行・懇談会開催さる
- 30 地域連携型の消防訓練が実施される
- 31 社会科学研究所附属日本社会研究情報センター創立10周年記念シンポジウムを開催
- 32 日露関係史料をめぐる国際研究集会を開催
- **33** 価値創成イニシアティブ(住友商事) 寄付 研究部門設立記念講演会開催される
- **33** アフガニスタンへの医学教育協力と カブール医科大学学長招聘

コラム

- 35 噴水 我が心の故郷 東京大学に送る感謝 の辞
- 35 調達本部です 第5回

- 36 Flags運動部紹介 No.11
- **37** 「バリアフリーの東京大学」 の実現に向けて 第3回
- 38 噴水 56歳で大学院入学、76歳で論文博士!
- 39 コミュニケーションセンターだより No.15

INFORMATION

シンポジウム・講演会

- **39** 21世紀の地球環境を考えるサマーワークショップYES2006のお知らせ
- **40** 教養学部進学情報センター主催シンポジウム「私はどのようにして専門分野を決めたか」

お知らせ

- 40 平成18年度運動会主催行事のお知らせ
- 41 第107回オルガン演奏会の開催
- **41** スポーツ・トレーニング(実習)開講のお知らせ
- **42** 平成18年度新規放射線取扱者全学一括講習 会開催と放射線取扱者再教育用資料の配付
- **43** GISサイトライセンスサービス、最新プロダクトをリリース!
- 43 バーチャルキャンパスサービスを開始!
- **44** 平成18年度総合図書館オリエンテーション 開催
- 45 総合図書館でe-DDSサービス開始

46 EVENT LIST

淡青評論

- 48 ディペンダビリティ
- ◆ 表紙写真 ◆

平成18年度入学者選抜の合格発表 (9ページに関連記事)

編集後記

先日、今号の表紙にもなっている合格発表に立ち会いました。胴上げ、抱き合う親子、満面の 笑みで電話をしている受験生などを見ていると、こちらまで幸せな気分になりました。自分が 大学進学で上京してきた頃のことを思い出すと同時に、学問、スポーツ、友情、恋愛など、彼 らにこれからめくるめく青春の日々が待っているのかと思うと、ちょっと羨ましくもなります。 あの頃のピュアな気持ちを忘れずに(?)、仕事に励みたいものです。 (と)



七徳堂鬼瓦

ディペンダビリティ

「安心・安全」が科学技術の目指すべき基本理念のひとつとされている。 情報ネットワーク社会の安心・安全を確保するためにキーとなる技術概念 はディペンダビリティ (dependability) である。今日、子供の遊びから国 家安全保障に至るまで、個人、企業、国の活動はそのあらゆる局面におい て情報システム・ネットワークに依存 (depend) している。その依存度が 強まれば強まるほど、システムと人間の多様で複雑な相互作用から生じる 予期せぬシステム障害の危険、無邪気なユーザーも悪意のユーザーもアク セスできるネットワーク環境での不法侵入や情報漏洩の危険、システムの

全貌を誰も把握できぬまま責任所在が不明確になる危険など、我々はこれまで経験したことのない様々なり スクに直面している。こうした社会の安心・安全を担保するためにユーザーに対して必ず「期待通りのサー ビス | を提供できるシステムは、信頼できる、すなわちディペンダブル(dependable)システムという。「期 待通りのサービス | とは、ユーザーにとってそれを受けることが価値であり、その品質に満足できるレベル のサービスである。それがそのとおりに提供されるならば快適であり、安全であり、安心できる。ディペン ダブルな情報基盤の実現が最優先の政策課題に位置づけられる所以である。

ディペンダブルな社会の実現には、そのインフラを支える情報技術のディペンダビリティに加えて、その 上に構築される制度や組織のディペンダビリティが確保されなければならない。ところが、このディペンダ ビリティの概念は、その適用範囲を技術の領域から人間や社会の領域へ拡大した途端に、むつかしくなる。 何が期待どおりのサービスか、何が望ましい状態かについての価値観がユーザーたる社会の構成員で共有さ れる必要があるからだ。価値観の共有がなければ目標も定まらないし、結果の評価もできない。我が国では、 国のあるべき姿、進むべき道についての価値観は共有されているのだろうか? 大学人は、あるべき大学の 姿に関する価値観を共有しているだろうか? 国立大学法人化について我々は価値観を共有してきただろう か? そうでないとディペンダブルな大学の建設に成功するはずがない。

南谷 崇(先端科学技術研究センター)

(淡青評論は、学内の教職員の方々にお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。)

No. 1333 2006年3月22日 東京大学広報委員会

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号 東京大学総務部広報課 TEL: 03-3811-3393 e-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に 広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会ま でお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見 の申し入れは、総務部広報課を通じて行ってください。